

Kodak Gray Scale

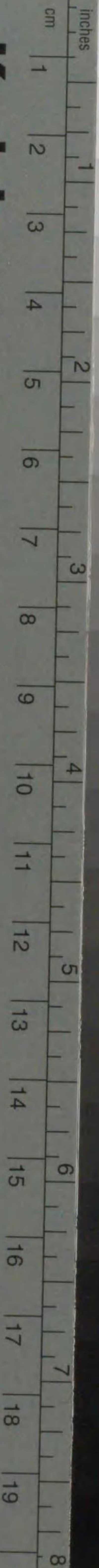


© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

Kodak Color Control Patches

- Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

563
18

563-81 1



1200600033676

3.8.14

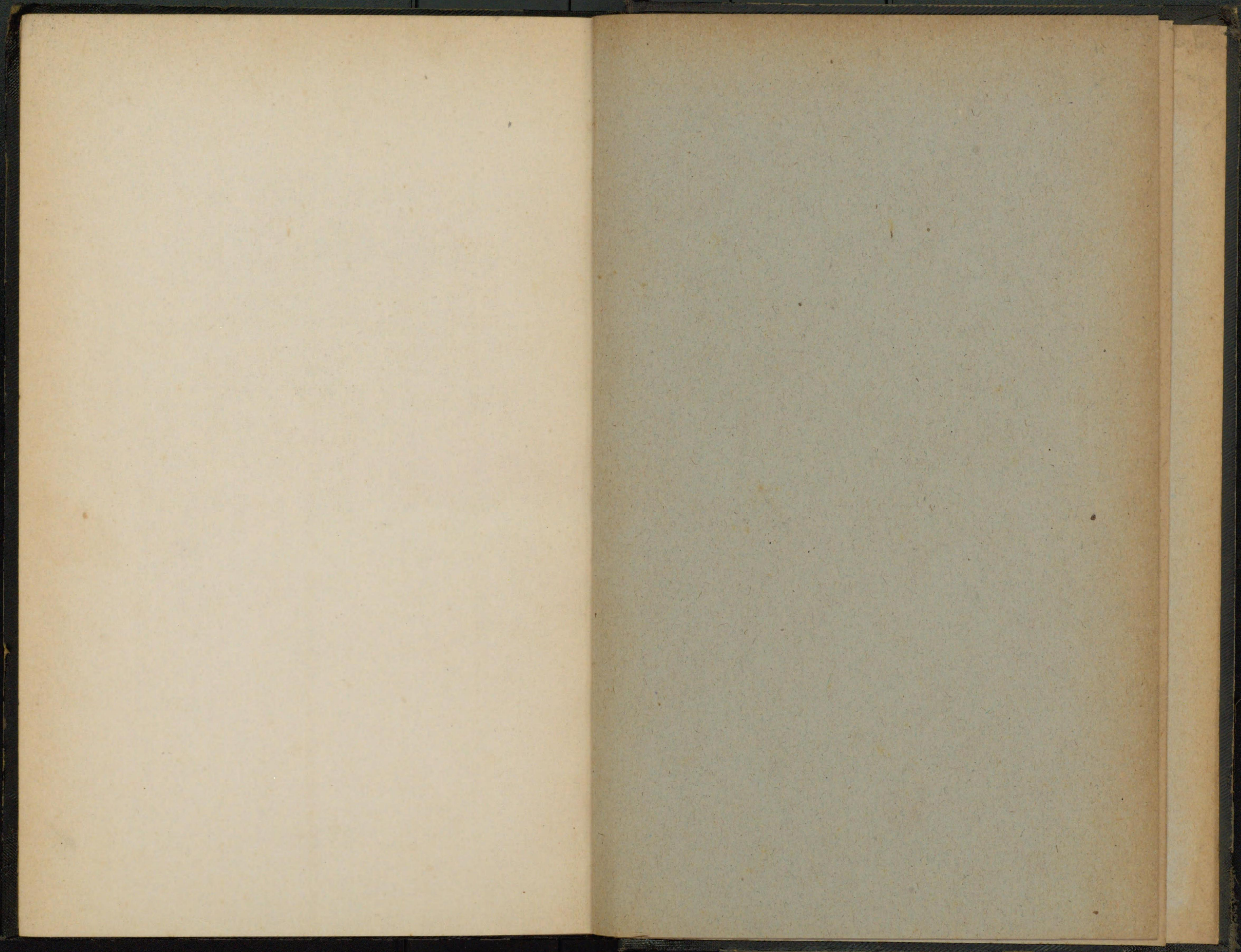
系大學美スプリ

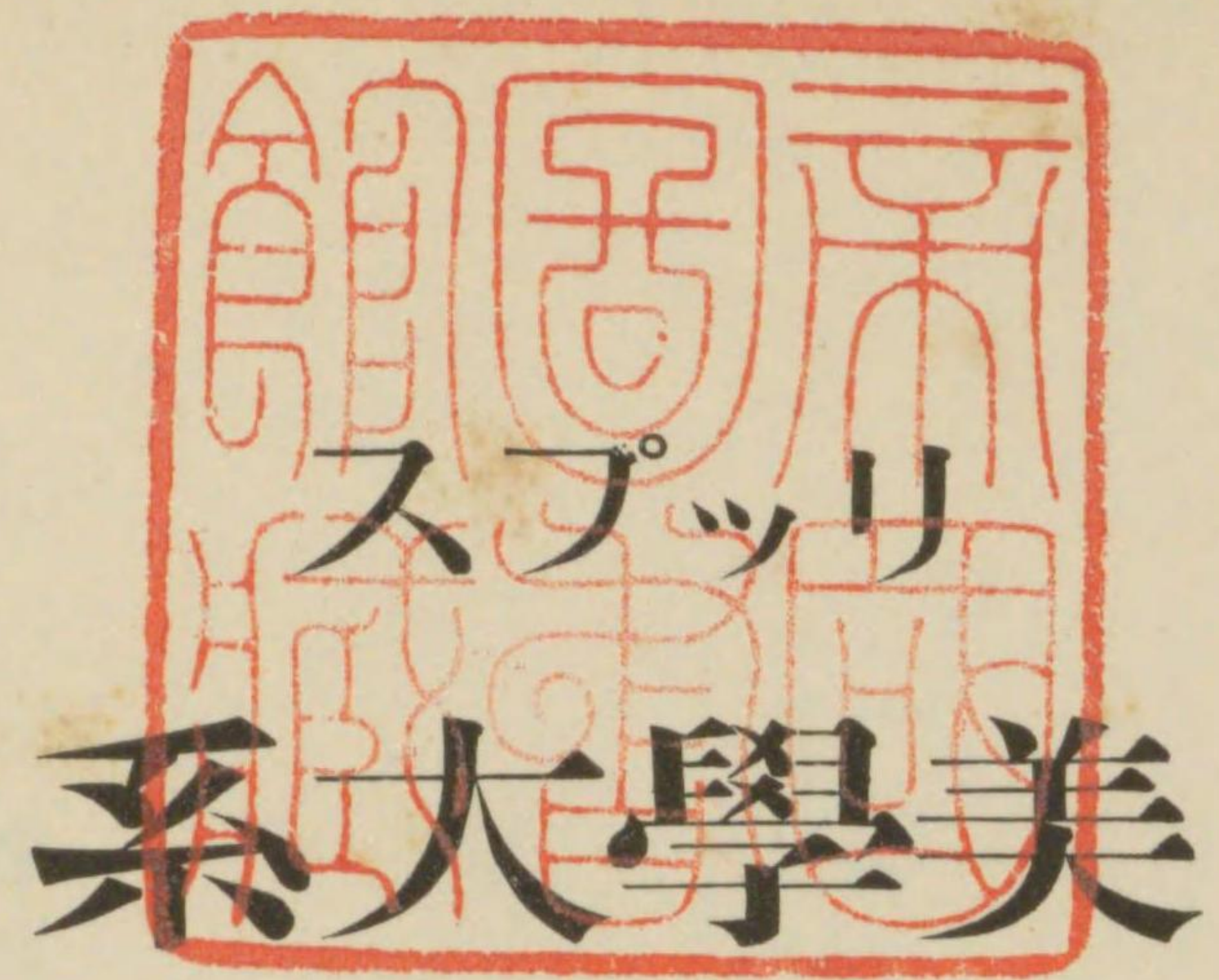
冊分五第

語と音と色

譯全松末垣稻

版藏館文同京東





冊分五第

稻垣末松全譯

色
と
音
と
語

東京

株式會社

同文館藏版





目次

第一章 色及び色の結合……………五七一

- 一 單一なる色の快感性(五七) 二 大なる対象の快感性、之に關し排斥すべき説明(五五) 三 對照に於ける統一性(五七七) 四 中等の間隔、三個一群(五八〇) 五 小なる間隔(五八二) 六 不快感的小なる間隔(五八三) 七 大なる間隔と小なる間隔との異なりたる效果(五八四) 八 諸種の統一化的因素——異なりたる光度の結合(五八六) 九 相互的移行をなす所の色(五八七) 一〇 被覆の原理(五八九)

第二章 色の中への感情移入……………五九二

- 一 色の有する「力」(五九三) 二 色と氣分(五九五) 三 氣分の感じ込み(五六) 四 氣分及び色の對照(KOO) 五 色と事物(六〇二)

第三章 協和音と不協和音……………六〇五

- 一 協和音と振動關係(六〇五) 二 振動繼起と音體驗との韻律上の類似(六〇七) 三 協和せる音感覺の韻律上の類似(六二〇) 四 右に對するより精密なる説明(六二二) 五 音韻律の理論(六四) 六 「音韻律」の系統としての調音(六二六) 七 種々の調音(六二九)

第四章 音樂美學の發端的根據……………六二二

- 一 兩數の原理(六三二) 二 音樂の根本法則(六三三) 三 長音階の三音と短音階の三音(六三四) 四 旋律の根本法則(六三五) 五 統配音と主調音との反對(六三六) 六 旋律の本質(六三九) 七 全音階より

目

次

目次

成立する旋律(六三) 八 主調音と第四音との反對(六三) 九 統配の第七音の媒介的任務(六五)
 一〇 旋律の分員、補説(六七) 一一 音列の高低(四〇) 一二 音韻律と大規模の韻律(六四) 一三
 發表としての音楽(六四) 一四 内部的運動と氣分(六四)

第五章 言語の象徴法、聽覺的元素と形式的元素…………… 六四六

- 一 情緒上の音聲(六四六) 二 言語上の音聲(四八) 三 感情移入としての言語理解(四五) 四 言語的象徴法の元素(六五) 五 音元素(六五) 六 韻律的元素(六五) 七 談話或は作品中の自我(六〇)
- 八 形式的の發表元素(六六) 九 知力的の發表元素(六六) 一〇 情緒上の發表元素(六六)

第六章 右の續き、言語的表現の物象的方面…………… 六六六

- 一 表白と客觀的報告(六六) 二 表白と客觀的報告をなす所の陳述(六〇) 三 間接的表現としての客觀的報告(六七) 四 客觀的報告をなす所の藝術に於ける感情移入作用(六七)

第五篇 色と音と語

第一章 色及び色の結合

一 單一なる色の快感性

空間的形に對する快感なるものは、韻律に對する快感と同様に、形式感情である。吾人は、本書の第一篇に於て、かゝる形式感情から、元素的感情といふものを區別した。元素的感情とは、單一なる色、例へば青とか赤とかに對する快い感情であるのである。

本來、形式に對する快感なるものは、均しく本書の第一篇に於て詳述したやうに、多様に於ける「美的」統一といふ原理に基礎するのである。そこで、元素的感情、或は單一なる感覺に對する快感なるものも、此の第一篇に於て説いたやうに、之と同一の原理に基礎せねばならぬのであつて、吾人は今此の事に立戻り茲に尙少しく叙述して見よう。

抑も「感覺」なるものは、感覺内容ではない。例へていふと、赤の感覺なるものは、吾人が先第一に「赤」といふ語を以て意味する所の、特異なる視覺的形相ではない。かゝる形相は、これ一の感覺されたもの、或は感覺の内容である。之に反し、感覺なるものは、正しく感覺である。即ち先第一に、視覺的刺激によつて生ぜられた心的



興奮或は運動である。若しも、右の視覚的形相、或はより一般的に云へば、意識的形相にして發生すべくあるとするならば、先づ刺激といふものが、此の如き心的興奮或は運動を解發せねばならぬ。かゝる心的興奮或は運動なるものは、意識的形相の必然的に根柢に存する所のものである。即ち意識的形相を存在するに至らしむる所のもの、かゝる形相の出現に於て意識に表示せらるゝもの、一言以て覆へば、之は感覺内容といふものに對立し居る所の感覺現象なるものである。

ところが、若しも感覺内容にして、快感によつて伴隨せらるゝならば、吾人は此の如き感覺現象をば、特別な統一性の現象と認めねばならぬ。同時に、快感の高さ、或は吾人が感覺内容に對して有する所の積極的の「感興」に應じ、之をば、それ自身の中に於て大なり小なり豊富に分化された現象と認めざるを得ないのである。

併し吾人は、此の事に關しては、此の上の詳細の事は、當分離れ見る事にしよう。孰れにせよ、一の目視された色の根柢に存する所の感覺現象、或は色の感覺を成立せしむる所の感覺現象といふものは、いつでも、特異なる性質の一の現象、興奮、心的運動であるのである。

而も此の如き性質は、當該の感覺内容中に於て表出される。けれども十分ではない。此の事は、次の叙述中に於て證明される。

由來色の感覺と音の感覺とは、共通なる或るものを有し得る。吾人は、深い色と深い音といふものに就いて語り、さうして此の際、「深い」といふ同一の賓辭が、色感覺及び音感覺の同種といふものを表示するといふ念を有する。吾人は又、直接に、「ウー」といふ母音が、深い「青」に比較さるべくあると云ふ。更に他方に於ては、明るい

色と高い音とは、内部的に類似して居るやうに吾人に見ゆる。

ところが、其の此の如くあるといふ事は、音と色、即ち此のやうな感覺内容中に、共通の或るものが存在するといふ事を意味し得るに至らない。此等の内容は、それ自體としては全然比較し得べからざるものである。蓋し色なるものは、何等の可聽的性質を有せず、又音なるものは、何等の可觀的性質を有しないからである。或る青は、青くて暗くある。即ち黒に近接して居る。之は又飽和してある。即ち灰色から可能的に遠く隔つて居る。さうして此の如く述ぶると共に、青といふものは、十分に表示される。けれども此のやうな賓辭は「ウー」といふ母音中に於ては使用されない。

此の如くあるが故に、深い音と深い色との間の一致といふものは、他の點に求められねばならぬ。さうして之が孰れの點に於てのみ求められ得るかは、容易く理解する事が能きる。

先第一に、深い色と深い音といふ二つの體驗の間には、此等が吾人の心を動かす方法、即ち一種特異に沈靜ならしむるか、嚴肅ならしむるか、擴大せしむるか等に關し、一致が存立する。

併しながら、此の如く深い色や深い音によつての吾人の被動状態の一致する方法といふものは、その根據を有せねばならぬ。さうして斯かる根據は、唯、音體驗及び色體驗そのものゝ一致の中にのみ存在し得る。けれども此の一致が、意識内容中に存在しない以上は、之は、之の外に存在せねばならぬ。さうして此の事は、唯次の事を意味し得るのである。曰く、兩者の感覺現象中に一致が存在せねばならぬと。

茲に至つて、吾人は、感覺現象なるものが、一致する所の要素をその中に帶有し、而もかゝる要素に對して

は、感覺内容中に於ける何等の一致する所のものが、應當しないのを理解し得るのである。かゝるが故に、一般的に、當該の感覺内容中にその相關物を有しない所の性狀をば、感覺現象なるものが有し得るのである。

此の如き事實關係は、決して驚くに足らない。蓋し、感覺現象なるものは、感覺内容の發生を促すものである以上は、いふ迄もなく、感覺内容の性狀はいつでも、感覺現象、或は心的興奮の特性により制約せらるゝのである。けれども此の性狀が、感覺現象の全體的特性により制約せらるゝのを要しない。凡て一つの感覺現象の中には、感覺内容の性狀に對し、性質上、無效果に止まるといふ方面や要素や成分が存在し得るのである。

色感覺中には、實に此の如き要素が存在するといふ事は、上述したるものに基き、疑を容れない。

されど之が如何にあるにもせよ、兎に角、各の場合に於て次の如くある。曰く、各の感覺現象は、その特異なる性質を有すると。或は之をより精密に云へば、各の感覺現象は、その特異なる興奮性質を有するといふ事になる。此の際、「興奮性質」といふ語の下には、特に感覺現象の性質といふものが理解される。かゝる性質とは、換言すれば、如何に吾人が、現象の體驗に於て、吾人を「内部的に興奮」せしむるか、或は「心を動かされて」感ずるかの方法を制約するといふ性質、或は制約する程度に於ける性質といふものである。さうして此の如き興奮性質をば、吾人は美しい色に於ては、次の如く言明する事によつて、稍詳細に規定せねばならぬ。曰く、此のやうな色に該當する所の心的現象、或は感覺現象に於ては、特別の質的統一性と分化性が存在すると。さうしてより多く、感興を刺激する色といふ形相の根柢に存する所の感覺現象中に於ては、より豊富なる分化性が存在するのである。

二 大なる對照の快感性 之に關し排斥すべき説明

けだし、個々の色が快感を起さしむるのみならず、或る種類の色の結合も亦快感を起さしむる。然るに此の反對に、他の種類の色の結合は不快感を起さしむる。此の事に關しては、吾人は、今一層精密に立入つて見よう。

先第一に、反對色、即ち色の系列中に於て可能的に遠く離れて立ち居る所の色の結合が快感を起さしむる。そこで例へば、青と黃の結合、紫と綠の結合、帶青綠と赤の結合は、快感を起さしむる。

ところが、此の如き結合の快感性は、一派の者によりては、生理的の「色の對照」といふ事實に迄、歸着せしめられる。その理由は、此の種の「色の對照」は、黃と青、赤と帶青綠、綠と紫といふが如き補色が、若しも並列して目視せらるゝならば、隨つて網膜の近接せる部分に對して働かざるゝならば、相互に増進する。かくて例へば、黃の傍の青、及び青の傍の黃は、吾人の感覺に對しては、青又は黃が、それ自身として目視せらるゝ時よりも、より光照的のものとなるといふ事から成立するに由るとされるのである。

かゝる事實關係は、既に「生理的」の對照といふ名稱が言明する如く、一の生理的過程の上に基礎する。生理的過程とは、若しも青と黃が、並列的に目視せらるゝならば、青感覺の生理的現象は、何等かの方法に於て、黃感覺の生理的現象に對して、増進的に働き、さうして此の逆もさうであるといふのである。

そこで、青と黃の此の如き生理的増進以外の何ものも、何故に兩色の並列が快感を起さしむるかの理由ではないやうになる。

然かはいふものゝ、此の如き説明は、疑もなく成立する事が能きない。若しもかゝる説明にして妥當であるとするならば、二つの色の並列といふものは、兩者にして特別の光照力を有する場合には、いつでも快感を起さしめねばならぬ。ことに、若しも任意の色にして、それ自體として、高度の光照力を有するならば、事實は此の如くあらざるを得ない。精神の外に存する孰れの實情により、高上せる光照力が發生せしめらるゝかの如きは、快感を起す所の精神に對して、勿論全然たる無關心的の事となる。精神に對しては、各の場合に於て、單に效果、即ち高上せる光照力といふものゝみが、存在するやうになる。

けれども、若しもその色にして十分高度の光照力を有するならば、任意の色の結合が快感を起さしむるといふ假定は、不適合にある。若しも吾人にして、可能的に光照する緑と、可能的に光照する青とを並列せしむるならば、然る時に吾人は發見するのである。此の如き色の並列は、高度の光照力によつて愉快を感じしめぬ。之に反し不愉快を感じしむるといふ事を。

此の如きが故に、吾人は右のやうな説明を棄却する。吾人は言明するが、精神の中に於て、色の結合に對する快感といふものは發生すると。そこで、此の種の快感は、右の第一の實例に於ては、黄の感覺と青の感覺とが一致するといふ事實に附着する。此の故に、此等の感覺は、精神の中に於て、相互に對し、特別の關係に立たねばならぬ。實に此の如き特別の關係に立ち始めて快感は發生するのである。

茲に至つて今や疑問を起さざるを得ない。曰く、此のやうな關係は如何なる種類のものであるかと。然るに斯かる疑問は、吾人が快感の根據を直接に與へ得るといふ場合を基準とし、之から比論する事によつてのみ、解答する事が能きるのである。斯くて此の種の比論をするならば、吾人の解答は次の如くなる。曰く、當該の兩感覺現象が共通なる或るものを有するに相違ないと。されど他方に於ては、此の如き共通のものとは、此等に於ても、分化されてあらねばならぬ。吾人は一般的に知得した。快感に對する最良なる場合は、いつでも、兩反對者が、同時に、共通的の元素をその中に包有し、さうして斯かる元素は、正しく此の反對といふものによりて分化をするといふ時に與へられるといふ事を。併し、反對といふものとなつての、一の共通なるものゝ分裂は、是最も十全なる分化である。さうして、一の共通なるものゝ分化の原理なるものは、是一般の快感の最高の原理であるのである。

そこで、黄と青との二つの色を實際相互に對照せしめて見る。さうすると、先づ、青の中には、黄の内容的の何ものも發見されなければ、又黄の中には、青の内容的の何ものも發見されない。此の故に、之に於ては、快感の一つの條件といふものが、直に與へられてある。

之に反し、吾人は、もう一つの條件の實現をば、此の如く直接に立證する事は能きぬ。蓋し、一方に於ては黄の感覺、他方に於ては青の感覺といふ二つの感覺現象は、之が感覺内容中に於て意識に告知されない限りには、直接に觀察し得べくあらぬからである。

三 對照に於ける統一性

右の如くあるとはいふものゝ、直接なる觀察が吾人に言明する事の能きぬ所のものをば、吾人は、思想で以て、

補成をなさねばならぬ。かくて吾人は、黄感覺現象と青感覺現象との共通性といふものを假定せねばならぬのである。

けれども又、此の如き共通性の存在を直接に指示する所の事實といふものも存するのである。本来、黄と青とは、狭義に於ける色である。此等の中には、凡ての色が所有し而も白、黒、灰色が缺損し居る所の「彩色」、即ち特異なる快活的のものが存在する。此の如くあるといふ事は、此等兩色の根柢に存する所の、兩色の感覺、或は精神的興奮中に於ける一の共通的元素といふものを指示する。此の故に、吾人は、よしや黄といふ感覺内容が、既に述べたる如く、青といふものを少しもその中に帶有しなく、又青といふ感覺内容が黄といふものを少しもその中に帶有しなくとも、尙右のやうな共通的元素を許容せねばならぬのである。

更に此の上に、之に關しては、吾人は尙他の事實、而も吾人に對し決定的にあるといふ事實を擧示し得る。それは即ち、吾人が兩色を一緒に目視する場合に吾人が有する所の感情的體驗、といふものゝ特質であるのである。

吾人は、此の兩色を一緒に目視するといふと、兩色の内部的連絡といふものに關する直接なる感情を有する。之は、例へていふと、吾人が音の調和に接して有すると同種類の感情である。此の故に又、吾人は、色の調和といふものを語り、さうして之をば音の調和と比較する。吾人は、兩場合に於て、一致或は和合といふ同種類の感情を有する。

ところが、吾人が後になつて尙攻究するが如く、音の調和の感情なるものは、その根據をば、調和せる音の感覺中に於て、共通なる元素が存在し、さうして之を結合する事により、一の共通なる根本的韻律が出現するといふ事の中にあるのである。

ふ事の中に有するのである。

音の場合に於て若しも此の如くあるとするならば「調和」せる色の結合に於ても、事實關係は同様にあるといふ事を吾人は假定せねばならぬのである。

或は、若しも吾人にして、色の調和と音の調和との此の如き類似例を離れ見るならば、吾人は尙一度、前に排斥した理論を想起する。その理論とは、青と黄の結合に對する快感なるものは、兩色が相互を増進するといふ事並に、兩色の並列に於ては、青はより青く、黄はより黄になるといふ事から、發生するといふのである。明かに此の如く、青の青といふ性、黄の黄といふ性の増進中に、兩色の尙他の質的差別、といふものが存在する。

そこで、疑もなく、此の如き差別といふものは、吾人の感覺に對しては、存立する。けれども之は、吾人の感情に對しては存立しない。之に反し、此の感情に於ては、右と反對のものが起生する。即ち兩色は、その並列に於て、吾人の感情に對し、遙に差別を生じない。之に反し己れを統一する。此等は相互に近接するやうに現出し直接に一の共通のものによつて結合さるゝやうに見ゆるのである。

吾人は此の事を尙一層精密に言明して見よう。吾人が、黄と青が並列的に吾人に與へられてある場合に體驗する所のものは、吾人が黄を目視する場合に體驗する所のものでもなければ、又吾人が青を目視する場合に體驗する所のものでもない。之に反し、吾人は、兩色の結合に接しては、同時に一の新奇なるもの、即ち黄及び青の共存中に於てのみ會て與へられたるものを體驗する。此の如き共通なるものゝ中に、黄と青が浸漬されて見ゆる。兩者は、吾人の感情に對しては、統一化されて現出する。黄は、結合中に於ては、もはや晴朗、愉快、氣輕にし

て同時にやゝ大膽なる黄ではなく、又青は、もはや静穩嚴肅なる青でもなく、之に反し、兩者は結合して、爽快
非嚴肅なる「黄と青」といふものになる。吾人は、兩者から成る全體に對し、一の統一的感情を有する。吾人
は、同時に全然たる一の反對性をその中に包有する所の、内部的被要求状態の同一なる方法を感知する。青に面
じての感情的體驗及び黄に面しての感情的體驗といふものは、黄に青に面しての一つの感情的體驗に、内屬もさ
れ、又從屬もするのである。さうして吾人は、此の如き感情的事實の根柢には、心的興奮、即ち「色感覺現象」中に於ける當該的事實と
いふものを置かざるを得ない。更にかゝる事實中に於ても亦、兩者をして一致するに至らしむる所の統一的にし
てそれ自體と同一なる要素といふものが存在せねばならぬ。さうして此の如き要素の中に、兩反對的興奮の特殊
なる點が内屬をする。而も此のやうに斷定し來る事により始めて、茲にいふ所の色の結合に對する快感が、吾人
に可解的になるのである。

四 中等の間隔、三個一群

吾人は尙一步を進めて攻究しよう。かの全然たる反對、即ち謂ふ所の「大なる間隔」の外に、中等の間隔とい
ふものもある。よしや上述したる如く、赤に對する絶對的の反對色は、帶青綠であるとはいへ、尙赤と青とは、
全然たる反對色と認め得る。赤と黄は、相互に對し質的に近く立つ。けれども此等は尙、十分なる程度に於て質
的に相互から異なつて居る。

之に反し、綠と青とは、相互に對し餘りに近く立つ。此等は十分明瞭に區別されてあらぬ。兩者は、或る方法
に於ては同一のものであつて、而も又同一のものではない。此の故に、綠と青の結合といふものは、隣接せる根
本色の中で最も少く快感を起さしむる結合である。此の際吾人は「根本色」といふ語の下には、純粹なる赤、黄
綠、及び青といふものを理解する。

而も此の如く述ぶると共に、根柢に於て既に言明されるのは、二つの色の並列の外に、三つの色の並列といふ
ものも快感を起さしめ得るといふ事である。此の際に於ける前提といふものは、それ／＼の、十分なる程度に於
て、質的に異なるやうに現出するといふ事である。同時に又、かゝる色に於ても、色の感覺を統一化する所の元
素、即ち一の「共通のもの」が假定されねばならぬ。蓋し、此の如き共通なるもの、基礎の上に、その共通
的なるもの、差別的變化が提供されるといふ事が、吾人に取りて快感的にあるのである。

凡ての三個一群（色の）の中で、赤、黄、青といふ三個一群に均しいものが一もないといふ事は、容易く理解
され得る。その故は、赤と黄の兩者は、最も判明に、青と反對する。尙その外に、赤と黄の質的距離といふもの
は、二つの隣接せる根本色の間に生ずる所の距離中の最大なるものである。即ち黄と綠との距離よりも大であれ
ば、又綠と青との距離よりも、尙一層大であるからである。

されど之に於ては、吾人は直に次の如き一の新奇なる要素を持來るのである。そは、今いうた赤、黄、青の三
個一群といふものは、若しも黄がより少く飽和されたとか、又は、絹の黄に於ける如くに、黄に對し中性的
の光輝といふものが加はるならば、よりよくされて現出する。次に、赤と青は、比較的の暗黒性、即ち灰色に迄を

れが近接し居る事によつて、一の共通的なものを有する。さうして若しも黄に於ても亦、かゝる近接が起生するならば、此の近接は、全體の三個、一群中の一の共通的な要素となるといふ事であるのである。

五 小なる間隔

以上の如く述べ來ると同時に、尙他の快感的の色の結合に迄遷移はなさるゝのである。吾人は直に注言する。かゝる結合に於ては、吾人の上述したる説明の正當に對し、もはや何等の疑惑も成立する事は能きないと。されど又、同一の一般的の事實關係、即ち色の結合の快感性といふものは各個に於ては全然異なりたる根據を有するといふ事は、不成立であるのである。

吾人は、之に關しては、先第一に、快感的の「小なる間隔」といふものに迄思念する。

多くの心理學者は、帶綠黄なるものは、綠や黄と同様の單一なる色であるといふ事を確説する。之は、或る意義に於ては疑もなく正當である。若しも吾人にして、帶綠黄を目視するならば、吾人は綠と黄との並列を目視しない。之に反し、吾人は兩者の孰れをも目視せずして、新奇なる色の帶綠黄といふものを目視する。けれども其の此の如くあるといふ事は、吾人が吾人の觀照に於ては、或は統覺的には、帶綠黄の中に於て、綠と黄とを分割するといふ事を妨げない。然るに吾人は、純然たる綠又は純然たる黄に於ては、此の如き區別を試みる事は能きない。かくて吾人の眼に對しては、それかというて、吾人の統覺或は把握に對しては、帶綠黄中に、綠と黄の兩者は存在する。さうして之に該當する所の言明は、帶赤黄に關しても成立するのである。

ところが帶赤黄と帶綠黄とは、調和するのであつて、さうして吾人の認むる所では、兩色に共通なるもの、即ち黄といふものが、同一の根本色として現出し、而も此の根本色は、兩色に於て反對の方向、即ち一方に於ては赤の方に、他方に於ては綠の方に、分化し限定されて益々多く現出すれば、益々多く調和するのである。

之と同一の言明は、帶黄綠と帶青綠との結合に關しても成立する。

然るに此の如き事實關係は、容易く理解され得る如く、全然、分化並に分化する所の從屬といふ吾人の美的法則に合當するのである。

更に又、一の根本色と隣接せる混合色との結合も、快感を起さしめ得る。此の如き結合といふものも、若しも共通なる色が、同一の根本色として、益々多く現出し、さうしてそれかというて同時に、兩色が判明に區別される事が多ければ多い程、益々良好に吾人に取りて見ゆるのである。之を例へていふと、吾人にして、帶赤黄の傍に、黄を置き、さうして此の際、黄をば光澤を少くして灰色に近接せしめ、かくて之が、帶赤黄中に於ける黄に分量上に於て同等なるやうに見えしむると假定する。かゝる場合には、此の結合は吾人に取りて特に愉快に現出するのである。

六 不快感的の小なる間隔

色の調和に關しての以上に於て常に前提され居つた説明といふものは、若しも吾人にして、ちやうど右に擧げた結合といふものに對し、他の外見上同種類のことを對立せしむるならば、その最も顯著なる立證を取得する。

例へば吾人が紫の傍に赤を置くと假定する。此の如き結合は悪くある。たとひ二つの色が赤であり、それかというて、紫の中に於ては、赤と十分反対し居る所の青が合體され居るとはいへ、尙宜しくない。かくて一般的に、赤と、中間にある紫及び堇菜の色を有する青との並列は、より少く快感を起さしむるのである。

ところが之に關しては、次の事を考慮すべくある。いふ迄もなく吾人は、堇菜をば帶赤青と稱し、又之と同様に、紫をば帶青赤と稱し、さうして之に對しては吾人は相當の理由を有する。けれども此等二つの色は、吾人の直接的印象に對しては、かの帶黄緑が黄と綠に迄分解さると同一の方法に於て、青及び赤に迄分解されない。之に反し、紫といふものは、吾人には、赤、而も純粹の赤と異なりたる赤と見ゆる。さうして堇菜は、吾人の直接的印象に對し、青、而も純粹の青と異なりたる青と見ゆる。此の如きが故に、紫と赤とは、兩者の共通點が、兩者を區別する所のものから、分離する事なしに、同一のものとして現出し、他方に於ては又同一でないものとして現出する。さうして之ぞ正しく、吾人が知得する如く、不快感の一の根據であるのである。

容易く理解さるゝ如く、此の場合に於ける事實關係といふものは、例へば赤と黄の結合と比較された所の綠と青の結合に於けるものと同一にある。吾人は云うた。綠と青とは、或る程度に於ては同一の色であり、それかというて又同一の色ではないと。此等に於ても、兩者の共通點が、兩者を區別する所のものから分離されないのである。

七 大なる間隔と小なる間隔との異なりたる効果

之迄吾人は、快感的なる色の結合といふものゝ二種類を並列せしめて居つた。吾人は今更に、吾人が兩者より得る印象が、質的に同一でないといふ事に留心して見よう。青と黄との間に於けるやうな大なる反対は、是粗硬高聲なるものである。然るに小なる間隔といふものは、云はゞより温和、靜穩、親密なる満足を與へる。前種の調和は、後種の調和の如く同種性のものである。けれどもより少く直接的の同種性のものである。

ところが此の如きは、疑もなく、次のやうな點に因由するのである。それは、小なる間隔に於ては、同一なる基礎、即ち共通なる根本色の爲に、より十全なる質的統一性が存立するといふ事である。此の如き統一性は、内部的同種性の高上された感情を發生せしむる。或は、かゝる感情に對し、右の粗硬なる反対といふものに於て缺損する所の親密性なるものを與へる。

併し吾人は、此の如くあるよりして一の歸結をなし得る。曰く、若しも此の如き小なる間隔に於て、質的同種性の感情の増進にして、かのやうな特殊なる共通的元素によつて來さしめらるゝとするならば、然る時には、吾人が青と黄、並列に於て有する所の質的同種性の感情といふものも亦、よしやより少く強い効果のものであるとはいへ尙一の共通なるもの、即ち質的統一性をなす所の元素の存在に基礎せねばならぬと。

されど他方に於ては、黄と青といふやうな大なる反対は、特に強い効果を及ぼす。而も之は、色のより判明なる區別といふものに基礎するのである。

併し、相反的のものが統一化せらるゝ場合には、いつでも、より強くて無媒介なる反対といふものが、より直接なる印象力を有するといふ事は、一般的の觀察である。無教育なる趣味の者は、常に強い反対を愛好する。然

るに、統一性のより大なる程度によつて緩和された媒介的の反對といふものは、より精緻なる感覺を要求する。かくて、色の強い反對、即ち無媒介の彩色性が、無教育なる趣味の者に對しより直接的に明瞭になるといふ事は、敢へて驚くに足らないのである。

八 諸種の統一化的因素——異なりたる光度の結合

吾人は更に進んで、より小なる間隔と共に、直接に「部分色」の並列といふものを附加し得る。凡て多種なる色の並列といふものは、若しも此等凡てに對し、共通なる色調トーンが加はり、かくて此等凡てが同一なる根本調に於て一致するやうに現出するならば、快感を起さしむる。之に於ては、容易く理解され得る如く、右に述べた場合に於けると同一の原理が、支配をなす。

之に對しても、尙他の事實といふものが、關連せしめられ得る。即ち常に共通の色調によるのみならず、更に共通の光線性質によつても、色といふものは、統一化をせられ、さうして之に該當して、一致するとか、又はより高度に一致するとかいふやうに、思念せられ得る。ガラス色に於ては、透照されたもの、絹の色に於ては、絹の光輝、東洋風の敷物に於ては、共通なる樹脂光澤、又その色を黒に近接するに至らしむる所の、明るい黄と白に迄の灰色の混合、最後に古代の敷物に於ける塵や汚れなどは、一の統一化的元素となる。更に他方に於ては、黒及び白、並に輝く金などに於ては、中性の線によつての分割も、統一化的の働きをなすのである。

ところが此の種の元素に就いては、尙他のものが持出され得るのであるが、兎に角、此等凡ての元素は、かの色の多様並に反對性を分化しながら興起せしめ居る所の共通の根據の印象を増進するのである。

此の外之に關して舉述すべきは、同一の色の種々の光度を並列せしむる事により生ずる快感性である。吾人は此の場合に、色をば「同一のもの」と唱へる事により、直に、色といふものを其の光度から區別し得ると言明する事が能きる。さうして斯くあるが故に、此の如き色の並列に於ては、色の共通性が、光度の反對性といふものに對立するのである。

九 相互的移行をなす所の色

最後に、色といふものゝ恒常なる相互的移行といふものは、色の並列と全然同一の地位に置かれてはならぬ。されど此の場合に於ても亦、吾人の一般的原理といふものは、有效と立證せらるゝのである。

先第一に、吾人がかゝる相互的移行に於て觀察する所のものは、上述したる事項と矛盾するやうに見ゆる。それは、かの粗硬或は無媒介的に並列されるといふと、不調和になるといふ色も、若しも一が他に迄移行をなすならば、甚だよく調和するからである。例へていふと、董菜或は帶青赤から赤への恒常的移行といふものは、決して不快感を起さしめない。然るに上述したる如く、此の二つの色の無媒介的並列といふものは、確に不快感を起さしむるのである。

併し之に關しては、次の事を考慮すべくある。即ち此の如き相互的移行といふものは、先第一に、特殊の統一化的力を有するといふ事である。吾人は、例へていふと、一の帶青赤から、赤といふものが、こゝそこに恒常的

に出現するのを目視する。此の際吾人は、孰れに於ても、並列せる帶青赤と赤とを目視しない。孰れに於ても反對性といふものは存在しない。全體の面は、異なりたる色の面から構成されない一の統一的の面である。それかというて同時に、吾人は、統一的の面に於て異なりたる色を目視するのである。

されど之に於ては、特に「恒常的の出現」といふことを重視すべくある。即ち赤なるものは、或る場所に於て、帶青赤に迄添加をなされない。之に反し之から出現する。此の故に、之は、帶青赤の中に於ては、到る所に存在する。吾人にして、若しも他の場所に於て之を目視せず、之に反し此の代りに帶青赤を目視するならば、之は次のやうな事情に因由する。或はその事情に因由するやうに見ゆる。それは即ち、こゝでは、青がその上に被覆されてあり、さうして赤は唯、之を透して發出透輝するといふ事である。之を他語を以て表出すると、全體といふものは、一の赤、而もその上に、時としてはより密なる青、時としてはより少く密なる青が存在するといふ赤であるのである。

さうして此の如くあると共に、吾人の把握に對しては、一の區別といふものが與へられ、さうして斯かる區別と共に、一の反對が與へらるゝのである。その實の所、吾人の印象に對しては、赤並に之と異なりたる色の帶青赤といふものが存立しない。之に反し、吾人が有する所のものは、吾人に對しては、唯次のやうな特異なる結合に於ける青及び赤である。その結合とは、吾人が、乙の色を透して甲の色の透輝並に之若くはその場所に於て甲の色より十分なる發出と言説するといふものなのである。

かくて、赤と帶青赤との並列は不快感を起さしむるのに、帶青赤から赤の恒常的出現といふものが快感を起さしむるといふ事は、可解的になるのである。

さうして、繪畫に於て、任意の隣接せる色の並列といふものは、若しも兩者が相互に對して粗硬的に接近せず之に反し相互的移行をなすならば、快感的にあるといふ事も、理解せられ得る。最後に又、特に、混合色から根本色の出現は（但し此の逆は成立しない）此の如き快感的効果を及ぼすといふ事も、理解せられ得るのである。

十 「被覆」の原理

右に述べたる特殊の事實關係、即ち一の被覆を透しての「透輝」といふものは、同一の色の種々なる光度或は飽和度の恒常的移行に於ても、問題となされ得る。此の場合には、暗黒或は灰色といふものが一の被覆として現出しさうして斯かる被覆からして、色が恒常的に作出せらるゝのである。而も此の如くあるよりして、此の場合に於ても、十分なる統一化の外に、より判然たる區別といふものが發生するのである。

されど、此の如き「被覆」並に之を透しての現出といふ思想は、尙他の意義を有する。即ち被覆から出現する所の色が、十分判明に可觀的になる場合に於ても、被覆は——吾人は之が何に於ても終止するのを見ない故に——尙存立するやうに見ゆるのである。吾人は此の故に、此の場合に、此の被覆を引去り見る。此の結果といふものは、色がより多く印象深くなる。或は吾人の感情に對し、一のより強烈又はより光照する色となる。此の故に、移行といふものは、此の場合には、特に密接なる統一化並に區別と共に、色の絶對的效果の増進といふものを、同時に來さしむるのである。

勿論此の種の言明は、帶青赤から出現する所の赤に關しても、成立する。此の言明は凡ての恒常的なる色の移行に關し、一般的に成立する。凡て、他の色から恒常的に出現する所の各の色は、その效果に於て増進せらるゝのである。

最後に、右の如く言明するとはいふものゝ、此の如き「被覆」といふ思想は、全然色といふものゝ恒常なる相互的移行或は出現に迄限劃されてあらぬ。吾人は之に關しては、先第一に、東洋的敷物の灰色調子を帯び居る白及び黄をば、尙一度想起する。吾人は、かゝる灰色が統一化をすると前に述べた。而もそれが斯かる統一化をするのは、此の種の明るい色をば、それ自體としては暗く随つて灰色により多く類似せる他の色に近接せしむる事によつてである。そこで「統一化」といふものは、次のやうな事を致さしむる。或はかゝる事を直にその中に包含する。それは即ち、吾人がより暗い色をば同一の光明に於て觀照するといふ事、詳言すれば、吾人に取りて、その暗さ、即ち灰色に迄その自然的近接が、純粹なる色に對する一の附加物として現出する事、恰も白及び黄の灰色が此の如くするが如くあるといふ事である。或は之を簡言すれば、吾人は、白及び黄に於ける灰色、並により暗い色の暗さと之の(灰色の)思想的統一化とを根據として、一の統一的にして凡ての色の上に廣布する色の思想を取得する。さうして此の如き被覆をば、吾人は今や先第一に白及び黄から取去り見る。されど正しく此の如くすると同時に、他の色からも取去り見る。さうして之と共に、此等の色といふものは、より多く彩色あるものとなる。之を例へていふと、純粹なる赤はより赤く、純粹なる青はより青くなり、兩者は、それが實際あるよりも、より飽和せるものと現出する。此等は此の如く現出する。換言すれば吾人の考察法の爲に、此の考察法に

應當する如くに此等が働くのである。

吾人が如何に高度に、右にいふやうな種類の敷物に於て、實際、白又は黄から灰色を取去り見るかは、容易く信憑する事が能きる。若しも吾人にして、此の白をば實際の白と比較するならば、如何に之がより少く白くあるかを驚くであらう。ところが、白から右の如く灰色をば取去り得るといふ事は、全體といふものにして分離せる色の並列として現出せず、之に反し色の統一體として現出する程度に應じて、他の色といふものは、必然的に利益を受くるのである。

さうして斯かる斷言は、他の場合にも移植する事が能きる。そこで、色の多數を統一化する所の色調といふものは、かゝる色調に關せず飽和して出現する所の色をば、より多く飽和しあるやうに見えしむる事になる。スプレッティング

さうして最後に、此の如き色調に關すると同一の言明は、統一化の之と異なりたる手段、例へば光輝とか塵埃とかに就いても、成立する事が能きる。若しも塵埃といふ被覆にして、一の統一的のものとして現出するならば、吾人は之をば、純粹なる色から取去り見る。さうして此の如くすると共に、此の色はより多く光照するものとなる。

此の如くして、結局する所、曾述したる粗硬なる反對といふものは、何くに於ても、一つの色を取出したり興起せしめたりする所の最良なる手段ではない。之に反し減少された反對、即ち色をば、一の被覆を透して目視し随つてそれ自體としてより透照即ちより飽和して現出せしむるといふ反對が、かゝる最良の手段であるのである。

第二章 色の中への感情移入

一 色の有する「力」

容易く吾人の了解し得る如く、以上の叙述中に於て、色といふものゝあらゆる可能なる結合が擧示されてあらぬ。之に反し、斯かる結合の快感性或は不快感性を可解的になし得る所の考察法といふものが明かにされあるのである。

されど、之迄、各個の色の効果、並に色の結合の効果に關して述べられた所ものは、今茲で多少の補説を要するのである。

吾人は、前に、色をば、色として考察した。けれども之は、之以上のものである。即ち色なるものは、それ自身に於て活躍的にある。さうして之は一の氣分の中に浸漬されてある。而も此の如くある事によつて始めて之は固有の美的事物となるのである。

之に關しては、特に、より一般的なる意義を有する所の一つの事實といふものが強調さるべくある。かくて吾人は、今此の所に於て、感情移入の之迄語つて居つた方法を補成する所の一の感情移入に接觸する。之は、右の感情移入と同種のものである。けれども又、之はそれに特異なるものを有する。即ち、之は先第一に、最も元素的種類のものである。

吾人は、光照して飽和せる色をば、一の「力強き」色と稱する。吾人は之と同様に、高い音をば、一の「強き」音と稱する。更に、かの強烈なる熱の中には、吾人に對し「力」といふものが存在する。而もその此の如くあるといふ事は、吾人をして何よりも第一に、吾人が前章の始めに於て述べたものを想起するに至らしむる。即ち吾人は、或る色及び或る音をば、「深い」といふ共通の賓辭を以て呼んだ。之は敢へて、「深い色」及び「深い音」と稱する感覺内容中に於て一の共通なるものが發見さるゝに由るのではない。之に反し、兩者が同一なる方法に於て吾人の働きを要請するからである。

ところが之と同様の事項は、今此の場合にも言明されねばならぬのである。吾人は「光照して飽和せる色」とか、「高い音」とか、「強烈なる熱」とか稱せらるゝ感覺内容中に於ても、「力」といふ名稱を帯び得る所の共通なる質を發見しない。之に反し、此の如き同一なる名稱といふものは、質的に異なつて居つてさうして不可比較的な感覺的體驗が吾人の働きを要請する所の同種的方法といふものを示すのである。

けれども此の第二の場合に於ける事柄といふものも、一種特異に存立するのである。即ち「力」なるものは、吾人によつて目視もされなければ又聴取もされず、更に觸知もされない。吾人は唯之を感知し得る許りである。力なるものは吾人のみに與へられてあり、さうして吾人の意志及び行為の力として知得される。かかる言明は、他のものに於ても常に成立すると同様に、此の場合にも成立する。そこで色の力なるものは、吾人の把握、即ち吾人の統覺的行為の力であるのである。

併しながら又、此の力は、吾人が勝手に費消する所の、把握の力であるのではなく、之に反し、色といふもの

が、その質、即ち吾人が「光照」とか「飽和」とかいふ賓辭によつて呼ぶ所のもの、爲に吾人の働きを要請する所の力である。蓋し謂ふ所の「力強い」色なるものは、多少の力を以て己れの方に吾人を引き付ける。換言すれば吾人は、吾人の中に於て、かゝる色の方に吾人を向注せしむべき刺衝、傾向、強制、簡言すれば一の欲求を體驗する。此の如き欲求は吾人の欲求である。けれども吾人は、之をば、直接に吾人から發するものとして體驗しない。之に反し、色並に其の特異なる質から發し、之に迄結合せられ、隨つて之に「附屬」するものとして體驗する。さうして斯かる欲求は多少の力を有する。而も此の如くある結果、色の力なるものは、吾人の欲求の力である。けれども又、其の特殊の質に「附屬」し、之に迄直接に結合し、此の中に於て、又之と共に直接に與へられる欲求の力である。之は色の限りに於ては、之は確に色の質の力である。或は之々の性狀、即ち光照して飽和せる色の力である。之は色の中に「感じ込まれたる」力である。之は、恰も、吾人の擴けられた手上に存しさうして之を壓伏しようとする所の石の力が、石の中に感じ込まれると同一の意義及び同一の方法に於て、色の中に「感じ込まれて」ある。此の石の場合に於ても、吾人が曾て知得した如く、一の可感的の刺衝、傾向、強制、簡言すれば吾人の統覺の力でなく、之に反し吾人の手の下方運動といふもの、欲求を體驗する。此の際に於ても、欲求は、それが石によつて吾人に強制されてあるが故に、石の欲求であるやうに見ゆる。さうして斯くある極、かゝる欲求の力は、石の力であるやうに見ゆるのである。

かくて「力強い」色の力なるものは、以上の如き顛末から發生するのである。此の力は、色の質の中に於て統覺に對する力強い刺衝、或は力強い統覺に對する刺衝が存在する限りに於ては、換言すれば、色及びその質の體驗に於て彼れが如き内部的の費消に迄要求されて吾人を感じる限りに於ては、色の質即ち光照及び飽和であるのである。

されど音に、光照して飽和せる色が力を有する許りではない。より少く光照飽和せる色も亦、力を有する事が能きる。此の種の色も亦、吾人をばその力及びその中に引き付ける。唯之が一の異なりたる力である許りである即ちかゝる色は、柔軟なる力を以て吾人をその中に引き付けるのである。

さうして此の如くして、最後に、各の色は、音に大なり小なりの力を有するのみならず、各の色は常にそれぞれ異なりたる力を有する。之を詳言すれば、吾人は、色を把握し保持し詳知せんが爲に之に向注する所で、常に異なりたる方法に於て欲求をする。さうして吾人がかゝる欲求、隨つて又力をば、色から發生するものとして體驗するが故に、かゝる欲求の力が、色の固有の力であるやうに見ゆるのである。

吾人が今茲に色に就いて言明した所のものは、他の感覺内容特に單音及び調音に迄、直に適用され得る。されど茲では何よりも先に色に就いて語るべくあるのである。

二 色と氣分

右に述べたやうな色の力並にかゝる力の特異性から、色の中に存在する所の氣分といふものは、異なつて居る。勿論、氣分にして一たび與へられた後には、右の力は、必然的にかゝる氣分の力となるのである。

吾人は前既に、黄をば、爽快、愉悅、氣輕等と稱した。かくて各の色は、その氣分上の特性を有する。吾人は

此の如き氣分上の特性を各個に記述するのを今茲に斷念する。世に、之を記述する爲に用ゐらるゝ所の語句は一義的でない。之は、甲の氣分上の特性に對しては、甲の特殊の「音色」を有有し、乙の氣分上の特性に對しては、乙の特殊の「音色」を有する。結局、「感情なるものは全權的のものであり、名稱の如きは烟と音とに過ぎなくある」のである。

そこで此の場合に於ては、先第一に次の事が判明する。よしや其の凡ての質を有する色なるものが、吾人の視感覺の内容であるとはいへ、さり進、晴朗とか爽快とかいふものは、此のやうなものではない。之に反し此等の名稱が言明する所のものは、唯一的に、吾人の人格の總狀態、吾人を内部的に行動したり活動せしめたりする總體的方法、簡言すれば一の「氣分」として知得せらるゝのである。けれども氣分なるものをば、吾人は目視しない。之に反し吾人の中に於て之を體驗するのである。

けれども人によりては、黄の爽快とは、全然吾人の快感の色彩に對する別名稱たるに過ぎないと思認するかも知れぬ。此等の人に據ると、黄が爽快であるとは、全然、吾人が黄に接して、歡樂或は満足の一の特有なる色彩を帯ぶる感情を有するといふことを言明する事になる。

かゝる思認に對しては、「快感の此の如き色彩に關しては何等の疑を容れない」と解答せらるべくある。けれども本來氣分なるものは、此の如き色彩とは全然異なりたるものである。吾人は、愉快なる味感覺に對しても、之々の色彩の快感を有する。けれども之が故を以て、味なるものが一の氣分の中に浸漬されてあるやうに見えない要するに、色の中に於ては常に氣分が存在するが、味なるものは氣分なしにあるのである。

既に述べたる如く、氣分なるものは、吾人の内部的行動、吾人の能働性又は受働性の一の總體的方法である。そこで、爽快といふ氣分は、吾人が輕易、自由、遊戲的に内部的活動をなし居るといふ事、次に嚴肅といふ氣分は、吾人が沈靜的強烈にして有力に統括せられ恒常的に固持せる方法に於て内部的活動をなし居るといふ事を言明するのである。

ところが吾人は此の如き氣分をば、色の中に移し入れるのである。氣分なるものは、吾人が色に面して起す所の感情、或はその對象を色とする所の感情といふものから、異なつてあると同様に、色そのものからも異なつて居つて、之は吾人が色に對して附加する所のものである。

その事實關係が實際此の如くあるといふ事に關しては、吾人は直接なる意識をする。吾人は、爽快なる黄、嚴肅なる深青、憧憬的の董菜、溫熱なる赤に關して快感を起す。吾人の直接なる意識の言明に従へば此の如くある。吾人は右の如き言葉により、吾人の直接なる意識、體驗を發表する。併し此の種の言葉は、爽快とか嚴肅とか憧憬とかいふものが、吾人の快感の單なる色彩或は被規定性でなく、之に反し快感の對象に迄附屬するといふ事を言明する。かくて、快感でなく、吾人がよつて以て快感を起す所の色彩といふものが、爽快、嚴肅、憧憬、溫熱的に見ゆるのである。

されど吾人は同時に、此の種の爽快、嚴肅等をば、黄又は青そのものから異なりたるものとして認知する。吾人は吾人の快感の對象中に於て、右のやうな氣分をば、その帶有者から區別する。吾人は吾人の快感をば、全然色の質に迄關係するものとして體驗しない。之に反し、尙此の外に、他のもの、即ちその質の周圍に浮動すると

か又はその質が浸漬し居るやうに見ゆる所の不可言説的のもの、更に換言すれば、それを圍繞する所の空氣、それから流出する所のもの、即ちその呼吸に迄關係するものとして體驗するのである。

併し此の如きものは是氣分なるものである。凡て氣分といふものが目視された色に對する關係は、恰も、一般の氣分が、その發見せらるゝ所の感官的のものに對する關係の如くにある。かゝる氣分は、色に迄附加せらるゝ所のものであつて、それかといつて色と最も密接に結合されたものである。之は、吾人が寺院又は森林中に於て叫ぶ時に生ずる反響の如きものである。此の如き「反響」も亦、叫びに附加せらるゝ所のものであり、それかといつて之に迄直接に附屬するものである。之は叫びから産出せられ、之の周圍に浮動する所のものなのである。けれども氣分なるものは、孰れかの場所からして色に迄附加せらるゝものではない。之に反し、之は、吾人により、色の中に「感じ込まれた」ものであるのである。

三 氣分の感じ込み

上述の如き氣分、或は色の中に「感じ込まれたる」吾人の内部的行動の一般的方法といふものは、如何にしたら可解的になるであらうか。

之に關しては先第一に、一派の者の説明は排斥すべくある。即ち色といふものゝ此の如き氣分といふ空氣は、決して彼等の思認する如く、經驗的聯想の中に於て根據づけられてある事は能きぬのである。吾人は、確に、赤い色の効果を判明にする爲には、赤なるものが血液の色であり、又は烈火の色であるといふ事を想起する。然るに

血液は生活及び生活熱の帶有者であり、烈火なるものは吾人を暖める。かくて赤が、溫、否熱の性質を有するの可解的になると彼等は云ふのである。

然かはいふものゝ、血液の色なるものは帶青赤であり、さうして最大の烈火は白色である。此の故に、若しも以上のやうな副式的の思想にして色の印象を決定するとするならば、固有の赤でなくて、帶青の赤、並に白色の烈火に類似する所の色が、より高度に、溫熱といふ印象を起さしめざるを得ない。されど此の如くある事の反對に、帶青の赤なるものは「冷淡」なる赤であり、さうして烈火の白色は、若しも他の所にて吾人に目視せらるゝならば、「熱烈ならしむる」といふものゝ反對であるのである。

之と同様の方法に於て、晴朗の日に於ける晴朗なる空の青色に均しい所の青は、爽快なる色として現出せねばならぬ。然るに青の性質といふものは、全然かゝる印象と異なるのである。

その實の所、氣分なるものは、右の如き經驗的聯想から可解的になるよりも、尙一層多く直接なる方法に於て色に迄附屬する。之はかの各の韻律といふものに一の氣分が附屬するといふやうな方法に於て色に迄附屬する。

吾人は韻律に關する叙說中の最終の章に於て一般的に知得した。特定の興奮性質或は内部的興奮の何等かの韻律をその中に包有する所の各の體驗は、該當する所の方法に於て精神全般を韻律附けるべき傾向を有するといふ事を。簡言すれば、體驗なるものは、それに該當する所の心的共鳴を作出するのである。即ち體驗は、それ自らの興奮性質と同種である所の全般的の内部的體驗の方法をして、吾人の中に於て力を取得せしむる。或は調子を合はするに至らしむるのである。

ところが此の如き同種のものゝ共鳴をば、各個の色が取得するに相違ない。各の色感覚なるものは、前に述べたる如く、一の特異なる内部的興奮或は運動である。そこで、此の如き興奮が、實際、類似せる興奮或は興奮法を喚起せしめたり、調子を合せしめたりする能力を有するといふ事は、既に色が音、例へば上に設示したる如く、深い色は低い音を想起せしむるといふ事實が證明するのである。

されど色感覚の中に存在する所の韻律をば、進んで精神中に放散すべき以上の如き能力（色感覚の）にして存立するとするならば、かゝる能力は、いつでも大なり小なり實現するに相違ない。さうして其の効果といふものは、其の効果が本性上行渡り得る所の吾人内のあらゆる可能なる興奮や思想や表象に迄、行渡るに至るに相違ない。同時に又、彼れが如き放散の能力は、吾人が色の觀照により多く献身してあればある程、益々多く實現せざるを得ない。吾人がかゝる觀照に献身してあるとは、まさしく、觀照が、吾人の中に於て特異的に働き居つて吾人の内部的現象を規定するものであるといふ事を言明するのである。かゝる場合には、觀照が先第一に、吾人の内部的體驗の總波動を規定するのである。

精神をば己れの方に調子附けようとの、各個の感覺の上述の如き傾向は、何よりも第一に廣汎なる内部的の生々動の中に於て働く。されど吾人は附言し得る。かゝる傾向は又、身體に對しても働き、之に該當する所の生活感情を作出し、さうして斯かる感情は、身體的基礎の種類の氣分に役立つ。

四 氣分及び色の對照

色なるものが、色以上のものであると同様に、色の結合も、色の結合以上のものである。

ことに、快感的の色の結合なるものは、吾人にしてそれにより多く献身してあるとか、或は全然その中により多く「没入」してあるとかすればする程、益々多く、吾人の總體驗に對し、より廣汎なる内部的生々動の一の統一的の方法であり、又同時にかゝる活動の分化である。或は之を逆に言明すると、右の如き色の結合なるものは吾人の内部的活動、或は一般的の生活可能の相對せる一般的方法の實現であり、それかというて同時に、一の統一的なる一般的の生活可能の實現である。之は質的に相對せる方向への、總精神の統一的の發現である。

されど之に關しても吾人はより一般的に語る事が能き。即ち吾人は、心的「全體性」或は相互的補成をなす反對性といふ一般的法則、更に詳言すれば、正しく相對せる活動法の全體即ち統一體として生活しようとの、精神の需要といふ一般的法則を語る事が能きるのである。

此の如き需要は、最も多く異種なる方法に於て證明される。吾人は先第一に、特に顯著なる一の實例、即ち滑稽といふものを想起する。蓋し最高の滑稽に於ては、最深なる嚴肅、沈黙なる靜穩、最高なる崇高等が、愉快なる遊戲、微小瑣細のものに對する笑ひなどと結合されて存在する。此等兩者は合體して、滑稽の中に於て、一の統一的の氣分となる。かゝる氣分の中に於ては、決して、崇高なるものが喜劇的になるでもなければ、又喜劇的のものが崇高になるでもない。之に反し、兩者は確に區別されて存在する。けれども之は、虛無によつて取巻かれたる崇高、爽快なる嚴肅、感傷的なる鼓舞といふより高遠なる統一體中に於て一緒に存在する。之は、單なる崇高の意義に於ける崇高でもなければ、又單なる喜劇的のものといふ意義に於ける喜劇的のものでもない。之に

反し、之は、それが實際ある所のもの、即ち新奇なる第三者である。此の如き新奇なるものは一つのものであるけれども斯かる一つのは、同時に、彼れが如き反對的のものに迄分化されてあるのである。

或は又尙他の實例を假り來り見よう。音樂に於ては、最低音に於ける嚴肅にして沈靜せる音階と上音調に於ける輕易にして活潑なる演奏との結合は、快感を起さしむる。又大なる自然に於ては、自然力の爽快なる遊戯や微細なるものに於ける生長開花等も、快感を起さしむるのである。

以上の如くして、一般的に、而も可能なる凡ての範圍に於て、「柔軟と結合せる嚴格」、「温和と結合せる強固」等は、謂ふ所の「愉快なる調音」となるに至らしむるのである。

吾人は、「シルレル」の「グロッケ」中に於ける此等の言葉が、究極する所何を指示するかを知得する。さうして之により、吾人は、かの「全體性」といふ法則、即ち反對的のものによつて、統一的人格を補成するといふ事が、人間に對して取得する所の最高の意義を想起する。蓋し各個人中間に於ては、如何に彼れが彼れ自らの行為に於て生活するかの偏局なる方法をば、存在及び人格的活動の反對せる方法を同感的に體驗する事に依つて補成しようとの、一の憧憬といふものが、存在する。男子、而も彼れによつてより多く現實の男子であればある程、益々多く彼れは女性に於て生活をなさうとし、又此の逆もさうである。此の如くするといふ事は、敢へて自己といふものゝ消滅ではなく、之に反し、一の補成、即ち反對的のものをば、一の新奇にして統一なる方法に於て感知しようとの結合といふものである。

さうして此の如く述ぶると共に、色の美なる結合といふものが美となるに至る所の最深なる根據が説示せらるゝのである。

五色と事物

以上に於ては、色といふものが、自然界の事物に附着するといふ事を離れ見て考察され居つた。けれども色にして、事物の色であるならば、その色が附屬し居る所の事物、換言すれば色が從屬し入り居る所の生活的連絡體といふものは、色自體として働く所のものと、その美的效果に於て、競争をなすのである。

されど此の際、附屬の程度といふものに留意さるべくある。唇の赤は、吾人にして之を唇に於て目視するならば、永久に生活といふものゝ色である。又、皮膚の或る色は、合經驗的に、天候や風や粗野なる物質的勞働に迄指示する。然るにそれの他の色は、存在や活動のより精神的なる方法に迄指示する。更に空の青色は、永久に、清朗なる日光、並に此の日光が言明し且つ意味する所の凡てのものと一緒に結合する。さうして木の葉の緑は、之と同様に、新鮮にして且つ無妨害なる植物生活に迄附屬する。

ところが、此の如くあると共に、まさしく此等の色は、當該生活の帶有意者、或は共同的帶有意者となる。さうしてそれが益々多く、此の如きものであればある程、益々多く色自體が有する所の意義といふものは消失し、さうして之が事物の特定なる種類の生活の帶有意者として取得する所の意義といふものが、顯著になるに至るのである。

けれども色が變化しさうして生活が合經驗的に同一に立止まる場合に於ては、關係は異なつてくる。即ち花

といふものは、あらゆる種類の色を有する事が能きる。随つて、合經驗的には、花の特定の色に對し、特定の種類の活躍性が結合されてあらぬ。此の故に、此の場合には、色そのもの、或は色自體が、高上された意義を取得する。換言すれば、他の場合、例へば七色景の色として快感を起さしむる所の色が、快感を起さしむる。さうしてそれ自體として不快感的なる色が不快感を起さしむる。

かゝる言明は、花の色に關するよりも、水の色、石の色等に關しては、尙一層多く效力を有する。

されど其の此の如くあるといふ事は、かゝる場合に於て、事物並にその性狀が、色の效果に對して何等の意義を有しないといふ事を意味しない。色が變化する場合に於ても、既にかゝる事物の色として吾人に知得されてある所の事物の色といふものは、正しく此の如くあると同時に、當該の生活的連絡體の元素として、吾人に取りて顯著である。此の逆に、吾人は、若しも一の事物にして、その事物に對し合經驗的に不可能である所の色に於て表現されてあるならば、該生活的連絡體が要求する所のものとの矛盾を感知するのである。

尙此の外に、吾人は、色と、それが附着する所の事物の表面性狀によつて取得する所の性質との間の區別をなさねばならぬ。一の花の赤といふものは、その全體の性狀上からすると、赤ではない。之に反し、正しく赤い花の赤である。之は、此のやうな特定の構造と之に該當しての光線に對する態度とを有する所の事物の赤い光明がある。さうして、若しも表面の性狀にして、合經驗的に特定の生活的連絡體に附屬する所の、特定なる種類の活躍性の帶有者であるならば、之によつて來さしめられた色の性質といふものも、斯かる意義に對し關與をなすのである。

更に又、人間の手の作成物、例へば絹織物も、特定なる種類の活躍性、即ち云はゞ人格的性質を有する。さうして之により色の性質が規定せらるゝ限りに於ては、此の場合に於ても、色、或は色の性質といふものが、特定なる種類の内部的活躍性の帶有者であるのである。

第三章 協和音と不協和音

一 協和音と振動關係

吾人は前に、音の繼起の韻律に就いて語つて居つたのであるが、今此の種の韻律を考察外に置いて見よう。さうすると、音樂の美學の根本問題として、協和音と不協和音との本質に關する問題が残存するのである。

由來吾人は、協和音と不協和音といふものをば、次の如き一種特異なる感情の爲に語るものである。その感情とは、吾人が音の同時的發生又は繼起の際に有し、さうして協和感情或は不協和感情と稱するものなのである。

此の種の感情たるや、單に一の快感であるのではない。吾人は、若しも一つの音とその第八音が和諧するならば、最も完全なる協和の感情を有する。けれども斯かる感情が、同時に、一つの音の和諧に接して有し得る所の最高の快感であるのではない。之に反し吾人は、より少く完全なる協和音に對して、より高い快感を有する。即ち一つの音とその第五音との和諧といふものは、吾人に取りてより多く愉快である。又一つの音とその第三音との和諧は尙一層愉快である。此等二種の和諧音の第一に於ては、協和といふ要素に對して、異他性或は反對性、

更に換言すれば比較的不協和といふ要素が加はり、その第二に於ては尙一層多く此の如くなる。けれども正しく此の種の要素が最高の快感に必要であるのである。

本来協和感情なるものは、音感覺を發生せしむる所の物理的振動繼起の關係に合法的依從をなすのである。假りにCといふ一つの音にして、一秒間に百の振動の規則正しき繼起から發生するとするならば、その第八音たるcは、同一の時間に於て、二百の振動の規則正しき繼起から發生し、その第五音のGは百五十、その第三音のEは百二十五の振動の規則正しき繼起から發生する。此の事をば、吾人は簡單に次の如く發表する。Cといふ音とcといふ音とは、その振動數に關して、百と二百との關係をなす。或は一と二との關係をなし、一の音とその第五音は二と三、一の音とその第三音は四と五との關係をなすと。

此の種の振動關係は、右の順列を追ふに隨ひ、單一性を減ずる。さうして之と同時に、該當せる音の協和の印象も減るのである。

最後に此の印象は不協和の印象となる。一つの音のCは、その大なる第七音たるHに對し、八と十五の關係をなす。之は甚だ多く單一でない振動關係である。さうして斯かる振動關係に該當して、二つの音の不協和といふものが發生する。

吾人にして此の如き事實關係に留意するならば、此の場合に一の依從關係が存するといふ事、即ち一方に於ては音の協和と不協和、他方に於ては振動關係の單一性とより少き單一性との間の合法的關係といふものは決して偶然でなく、之に反し、音の協和と不協和とは、振動關係の單一性及びより少き單一性によつて來さしめられるといふ思想が、自然的、否殆んど自明的であるやうに見ゆる。實際に於て吾人は此の如く假定せねばならぬのである。

勿論先第一に次の事が記憶さるべくある。曰く、吾人が茲に就いて語り居る所の振動なるものは物理的の振動であり、さうして協和の感情なるものは、各の感情と同様に、精神の中、於て起生すると。此の故に、彼れが如き振動關係の存在が直に、協和或は不協和の感情を根據づける事は能きぬ。協和或は不協和の感情なるものは、唯次の如き假定の下に於てのみ振動關係から可解的になり得る。その假定とは、若しも此の如き振動或はその關係が、振動から發生する所の心的體驗中に於て、一言を以てすれば、音體驗中に於て存現するといふ事である。

二 振動繼起と音體驗との韻律上の類似

此の題目に關しては第一の疑問が起る。曰く「音體驗」とは如何なるものであるか、或は今此の所では如何なるものと解釋せねばならぬかと。

先第一に、此の音體驗といふ語を聽取する所の者は、疑もなく、感覺的内容、聽覺的現象、音形相、簡言すれば吾人が爲に音といふものを語るに至る所の意識内容といふものを思念するであらう。ところが此等のものの中には、疑もなく上述の如き振動及び振動關係といふものは、少しも存現しないのである。

然るに此の如き音は感覺される。即ち吾人が音と稱する所の感覺内容、聽覺的要素、形相なるものは、一の聽

覺的刺激が耳に對して働き、次に進んで精神に對して働き、之を興奮せしむる事により、發生する。さうして此の如き興奮、或は感覺内容の根柢に存する所の此の如き心的現象、此のやうな意義に於ける「音體驗」、更に一言を以てすれば音感覺現象中には、確に、彼れが如き物理的振動といふものは、響き込み得るし、又響き込まねばならぬのである。

吾人は之が如何なる事を意味するかを尙一層精密に言明しよう。吾人は先第一に、振動關係に尙一度注目して見る。一秒間に百の振動の繼起は、一定の音を發生せしむる。ところが斯かる振動繼起は、一定の韻律をその中に包有する。此の際、かゝる韻律といふ語の下には、單に次の如きものが理解される。それは、元素の一定の數、今の場合には振動といふもの、一定の數が一定の時間に於て規則正しく繼起するといふ事によつて規定されてある所の、元素の繼起の方法といふものである。吾人は一秒間に百の元素の繼起の「韻律」をば、簡單に百の韻律と稱する。さうして斯くあるとすると、一秒間に二百の元素の繼起の韻律をば、吾人は二百の韻律と稱すべくあり、その他凡て此の如くあるのである。

ところが此等二つの韻律は共通なるものを有する。即ち百の韻律は二百の韻律中に於て復起する。又二百の振動繼起は百の元素の繼起である。唯百の單一なる元素でなく、之に反し百の「二倍の元素」或は各二個の元素から成る百の統一體の繼起である。吾人は又言明する事が能きる。二百の韻律といふものは、百の韻律の各の元素が、更に二つの元素に迄分裂するとか、或は二つの元素からの統一體として表現する事により、百の韻律から發生すると。

吾人は今、二百の韻律及び三百の韻律を有する二つの振動繼起をば、更に進んで相互に對立せしめて見よう。之も亦、百といふ韻律を共通に有する。之に反し、二百と二百五十の振動の音の韻律は、唯五十といふ韻律を共通に有する。

吾人は尙之以外の言語上の規定を附加しよう。吾人は二つの振動繼起の共通の韻律をば、いつでも其の基本韻律と稱する事が能きる。そこで二百と三百の振動繼起に於ては、百の韻律が基本韻律であり、二百と二百五十の振動繼起に於ては、五十の韻律が基本韻律であるのである。

否實に、右の甲の二個の韻律中には、百といふ韻律が「根柢に」存在し、乙の二つの韻律中には五十といふ韻律が「根柢に」存在する。彼れに於ては百といふ基本韻律、之に於ては五十といふ基本韻律が、反對的なる方法に於て「分化」されてある。

然るに、物理的振動の繼起によつて解發される所の心的興奮といふものは、自明的に、その繼起の性状によつて制約される。さうして斯くあるが故に、種々の振動繼起の差別的性質を構成する所の、此の如き振動韻律が、該當する所の心的興奮中に於て何等かの方法に於て復起するとか、或は此のものゝ中に何等かの方法に於て「響き込む」とかいふ事は、決して珍奇の假定ではなくて全然自然的なる假定であるのである。吾人は「何等かの方法に於て」といふ。何となれば吾人は、今茲に語り居る心的興奮をば、それ自體としては、換言すれば吾人が吾人の意識體驗から歸結し得る所のものを外にしては、知得しないからである。

此の際に於ても亦、本質的重要であるのは、振動韻律自體が感覺現象中に包有されてあるといふ事ではない。

之に反しかゝる韻律の關係といふものが、此の如き心的現象中に於て更に存立するといふ事のみが、重要であるのである。

三 協和せる音感覺の韻律上の類似

吾人は、此の如く「協和せる音感覺の韻律上の類似」といふ假定をば、「自然的のもの」と呼ぶ。實際に於て、かゝる假定は必然的のものであつて、而も之は種々の理由から斯くあるのである。

第一に、協和せる音は、不協和の音よりも、相互とより容易く融合する。換言すれば、此等は一つの調音としてより容易く聴取される。されど此の如き融合の條件といふものは、いつでも同種性といふものである。尙音が融合して調音となる事に關しては、後になつて再び述ぶる事にする。

さうして第二には、高度に協和せる音、殊に完全に協和せる音、隨つて原音と第八音との如き關係をなす音は若しも此等が順次に與へらるゝならば、容易く相互に混同される。ところが此の如き事が、同種性である所の音に於ても起生するのである。

更に之と關連して第三の理由が生ずる。吾人は、よしや一つの音とその第八音とを混同しないにもせよ、尙第八音といふものは、吾人の直接的印象に對しては、或る方法に於ては、原音と同一のものである。唯正しく高音調に於ける許りである。吾人は、第八音の程度に相互から異なる音をば同一の名稱を以て呼ぶ事により、此の如き事實關係を判然承認する。

最後に最も重要な理由は、協和感情といふ事實である。吾人は、かゝる協和感情と同様なる感情をば、一つの調和が起生する場合に有する。

されど協和感情を此の如き同様なる感情と比較するといふ事は、吾人をして、協和感情の根柢に存する所の調和といふものをば、直により精密に規定する事を能きるやうにならしむる。かくて、協和感情なるものは、「調和」の任意なる感情ではなく、之に反し愉快なる内部的統一或は一致、換言すれば内部的關連或は質的關連の感情となるのである。

ところが此の如き感情は、吾人が知得する如く、各體驗の間に何等かの同種性が起生する時に發生しない。之に反し、かゝる體驗が一の共通のものを有し、さうして此等に於ける斯かる共通のものが異なりたる方向に分裂するとか、或は、異なつて居つて結局は反對的なる方法に於て分化する時に、發生するのである。此のやうなものに對しては、吾人は是迄に十分澤山の實例を擧述し置いたのである。

此の如くあるが故に、今此の場合に於ても、彼れが如き共通のもの、並にかゝる共通のものゝ分化といふものを認容せねばならぬのである。

四 右に對するより精密なる説明

吾人は右に關し尙一層精密に語つて見よう。容易く認知され得る如く、吾人は此の場合に於て、先第一に、協和感情なるものは、彼の、一の共通のものゝ分化から發生しさうして之のみから發生するが如き一致の感情

或は内部的統一或は質的統一、更に換言すれば関連の感情と同種のものであるといふ事を主張する。協和感情の最近の類似者は、吾人が、變化し居るけれど又共通なる基本韻律によつて結合された大仕掛けの韻律に接して有する所の内部的一致の感情である。此の如き感情は、例へば大鼓の音の繼起の韻律、又は個々に之々に分化或は分員されるやうに見え、それかというて其の基本形に於ては同一に存留するといふ音の繼起の韻律に接して吾人が有する所のものである。之と同様に協和感情に直接に類似して居るものは、種々の形を有し而も同一なる構成法則の下に立つ所の建築品の部分の一致の感情である。

尙此の外には、既に前に述べた事實といふものに迄特に指示をなすべくある。その事實とは、音楽上の協和感情の高さと共に、快感の高さが直接に並行しない。之に反し快感なるものは、協和感情がより少く單一なる協和の感情である場合には、或る限界迄は増強するといふ事である。更に此の點に於ては、音楽上の協和感情なるものは、吾人が他の場合、例へば統一的の建築品に於て發見するが如き内部的一致の感情と趣を同うする。一致の凡て此等の場合に於ては、彼れが如き事實關係は、直接に、一致の上述のやうな内部的構造、換言すれば、一の共通のものゝ分化といふ上述のやうな事實から發生する。蓋し、いつでも共通のものゝ存在といふものは、一致の感情に對しての根本條件であり、さうして他方に於ては、かくあるにも拘はらず快感の高さなるものは、或る程度の多様、差異、反對性といふものが、共通のものに迄附加せられ、之に對して均量を形成するとか或は之に對し比較的均衡を保持するとかいふ事によつて制約される。而も此の如くあると同時に、いつでも一致の感情は減少する。或はより少く單一なる一致の感情となるのである。

併し凡ての他の場合に於て此の如き事實關係をなすならば、音楽上の協和の感情に於ても、協和感情と快感との間の同様の關係といふものは、同一の原因を有せねばならぬのである。

以上凡ての論究の結果は次の如くある。協和せる音の感覺に於ても、一の共通のものが存在しさうして之がその中に於て分化されてあるといふ假定をなすべく、吾人は、絶對的に強制されると。

同時に、かゝる音にして、より多く協和してあればある程、共通のものは益々多くより廣大なるもの、換言すれば益々高等なる程度に於て音の感覺或は心的の「音體驗」を包括しさうして相互に迄之を結合する所のものと、思念されねばならぬ。又協和にしてその完全性を益々多く減少すればある程、益々大なる反對性といふものがかゝる共通のものに迄對抗せねばならぬのである。

ところが凡て此等の事をば、吾人は、協和せる音とより少く協和せる音とに該當する所の物理的振動の韻律中に於て發見する。吾人は此の中に於て、彼れが如き統一化をする所の共通のもの、並に彼れが如き反對性のもを直接に發見する。吾人は、二つの音の協和にしてより完全であればある程、益々高度に、その根柢に存する所の物理的振動繼起が、一の共通なる基本韻律によつて相互に結合せらるゝのを發見する。さうして吾人は、協和音にしてより多く不協和音に近接すればある程、或は不協和音に迄移行すればある程、益々多く、共通なる基本韻律が差異性及び反對性によつて排逐せらるゝのを發見する。此の如きが故に、此のやうな物理的振動中に於て、直接に、吾人が「音」、換言すれば「心的の音體驗」、或は音感覺現象に對し、之から獨立的に、協和感情といふ事實の基礎の上に要求せざるを得なくある所のものが、與へられてあるのである。

さうして茲に至つて、今や次のやうな假定が不可避的にある。曰く、兩者の間に内部的の關連が存立する。曰く、一言を以てすれば、物理的振動繼起の「韻律上の類似」といふものが、當該的の音體驗に對し吾人が承認せざるを得なくある所の類似といふものを根據づけると。吾人は假定しない。音樂上の振動繼起間の彼れが如き韻律上の類似が、精神或は腦髓に迄の通路中に於て失はれ、さうして茲で新奇に一の驚異によつて發生せらるゝといふ事を。

此の事は意味する。吾人が次の如く言明する事に於て立留らねばならぬといふ事を。曰く、物理的の韻律なるものは「何等かの方法に於て」、音興奮或は音感覺現象の中に「響き入る」と。之は少くとも此の事をば、韻律上の關係が此の際保持されてあるといふやうな具合に於て仕遂ぐるのである。

而も此の如く述べ來ると共に、吾人は、一の可能なる、否吾人が附言するが、心理的法則上唯一的に可能なる所の、協和音及び不協和音の説明を受領するのである。

五 音韻律の理論

吾人は今、二百と三百の振動の音に迄復歸して見よう。茲に與へられたる韻律といふものをば、吾人は吾人の十分なる確信に従ひ、今振動繼起によつて生ぜられた心的興奮中に迄響き入らしむる。吾人は此の故に、かゝる心的興奮をも亦、相互から繼起する所の興奮元素から成立すると認むる。或は此の如きものに迄分解し得べくあると思念する。さうして吾人は、元素のかゝる繼起が、相互に對し、二百と三百或は二と三の關係をなすと假定する。

而も此の如くあるとすると、此の種の音興奮も、一の韻律を共通的に有する。かゝる韻律は、二つの音の各に於ては、それ自體として考察された「基本韻律」なるものではない。之は唯可能上此のやうなものである。蓋しかゝる韻律と並列して、多くの他の基本韻律が、可能上、二つの音の各の中に包有されてある。けれども音興奮が共起する事により、彼れが如き韻律が、共通的の基本韻律となる。此の種の共起に於ては、音興奮の各は、他の興奮中に於て共通的の韻律を固定し、之を興起せしむる。簡言すれば之をば事實的の基本韻律となるに至らしむるのである。

さうして今や此の如き基本韻律が、甲の音に於ては、甲の方法に於て、乙の音に於ては乙の方法に於て分化されて現出するのである。

されど、振動關係、さうして之と共に各個の音體驗中に於て與へられたる韻律の關係が、より單一であればある程、益々多く、二つの音の基本韻律中に、此の如き二つの音の全體が包有されてある。或は之によつて代表されてあり、隨つて基本韻律が、益々高度に二つの音を同時に己れの中に包有する。此の如きが故に、振動關係にしてより單一であればある程、益々多く二つの音體驗が共通なる基本韻律によつて内部的に統一されてある。さうして由來協和といふ事は、此の如き統一化に外ならぬから、協和なるものは必然的に、振動關係の單一性と共に増加するのである。

協和せる音の此の如き統一化といふものは、若しも音にして同時的に與へられてあるならば、それが順次に與

へられてある場合と同様に、唯一の基本韻律中に於て起生する。此の第二の場合、即ち二つの音が順次に與へられてある場合に於ては、若しも一の音にして他の音の爲に、全然忘失されてあらぬならば、兩音は精神の中に於て共起する。唯共起が、此の場合に於ては、既に存在せる他の音に迄の一つの音の附加であるのである。

六 「音韻律」の系統としての調音

吾人が右に語つて居つた所の音なるものは、單一なる音であつた。詳言すれば、振動の單一なる繼起、或は、發音體の部分並に外圍の空氣の單一なる振子様の揺動の規則正しき繼起から發生するやうなものであつた。けれども音樂が取扱ふ所の調音なるものは、此の如き單一なる音ではなくて、正しく調音である。即ち單一なる音の大なり小なりの數の融合して生じた產物である。

之が實例としては、「ピアノ」の絃から發する調音が適當する。若しも「ピアノ」の絃が奏せられるといふと、音にかゝる絃が全體として、或は全體に於て、振動する許りではない。更に之は同時に、その半分、三分の一、四分の一等に於て振動する。之を換言すると、一方に於て全體の絃が振動するのに、他方に於て同時に、其の半分、三分の一等も亦、それ自體として振動するのである。

ところが此の如くあるよりして、種々の振動繼起が發生するのである。例へていふと、全體の絃が一秒間に百回あちこちに振動するとするならば、半分、三分の一、四分の一の絃等が、同時に而も同一の時間中に於て行ふ所の振動の數は、それぞれ、二百、三百、四百等に達するのである。されど此等凡ての振動繼起には、音といふものが該當するのであつて、此の種の音は、容易く認知さるゝ如く、順次高さに於て増加する。けれども之が高さに於て増加すると共に、強さに於ては同時に減少するのである。

然るに又、此等の音は、最も單一なる振動關係に立つのである。之は、振動數に關しては、相互に一、二、三等の關係に立つ。吾人にして此等の音の中の最も低いもの、即ち全體の絃の振動から發生する所の音をば、簡單にする爲に〇と呼ぶならば、半分、三分の一、四分の一の絃の振動から發生する所の音は、右の順序上、此の音の第八音の〇、その十二音或は此の第八音の第五音、第二の第八音の、即ち此の第二の第八音の第三音等であるのである。

ところが、此等の音は、それ自體としては聴取されない。之に反し此の如き音の代りに、聽感覺に對しては、或はより一般的に言明して意識に對しては、「調音」なるものが現出するのである。本來音なるものは、「客觀的」のものである。即ち物理的現象として與へられる。此等は耳に到達して精神を興奮せしむる。けれども精神的興奮、即ち音感覺現象なるものは、各自それ自體としてそれに附屬する音を聴取せしめない。之に反し此等は結合して、吾人が調音と稱する所のたゞ一個の聽覺的形相或は音形相を發生せしむる。さうして音感覺現象が此の如く結合して調音と呼ぶるゝたゞ一個の聽覺的形相を發生せしむる事からして、調音に迄の音の「融合」といふものが、成立するのである。

音なるものが此の如き方法に於て調音に迄融合するが故に、之は、調音の「部分音」と呼ばれる。此等の中で最も低くあつて又通常最も強いものは、右の場合に於ては、〇であつて、之ほ調音の「原音」である。然るに他の

音は、此の「陪音」と稱せらるゝのである。

各の調音は、その特定の高さを有する。此の如き高さは、原音の高さと一致する。此の故に原音は調音の高さを確定する。之に反し意識中に於ける陪音の存在といふものは、單に調音の音色といふものとなつてのみ、知得される。調音なるものは、一般的の陪音、或はその中の或る陪音の數と強さとに應じて、甲若くは乙の音色を有する。

吾人は、調音中の各個の部分音が、それ自體として聴取されないと云うた。調音にして調音として吾人に對して存立する限りに於ては、換言すれば音感覺現象が一つの調音に迄融合する限りに於ては、實際に於て事實關係は此の如くある。けれども又、かゝる現象の各個は、獨立化さるゝ事も能きる。此の場合には、該當する所の音が聴取せられ、調音なるものは「分解」をされる。此の如き分解が生ずる程度に於て、調音は調音でないやうになり、之は和音といふものとなる。調音の此の如き「分解作用」なるものは各個の音感覺現象の獨立化であつて之により此の種の現象は、各自融合して一つの調音となる代りに、己れ自身にのみ附屬する感覺内容を喚起する事が能きるやうにならしめられる。併し此の種の調音分解作用なるものは、吾人の美學に取りては、此の上の何等の意義を有しないのである。

一つの調音の凡ての部分音なるものは、その振動關係に就いて上に言明した所に據ると、唯一の基本韻律を有する。即ち直接に原音中に與へられてある所の韻律を有する。上記の場合に於ては之は百の韻律である。さうして調音の凡ての部分音は、かゝる基本韻律の分化したものである。此の如きが故に、調音なるものは、一の絶對的に統一的にして、同時に「音韻律」の大なり小なり豊富なる系統である。何故に絶對的に統一的であるかといふに、唯一個の基本音律が凡ての音に對して基礎となり居るからである。此の如くあるよりして、吾人は、吾人が音樂上の調音に接して有する所の内部的統一性、或は己れ自體との調和の感情といふものを理解する。さうして又吾人は、此の如き感情の快感的性質をも理解し得るのである。

七 種々の調音

之迄吾人が假定し居つた所の調音なるものは、正常調音であつた。正常調音とは、その中に凡ての可能なる部分音が與へられてあり、同時に之が強さに於て上方に順次に減少するやうにあるものを云ふのである。

けれども又、一の調音の中に於て高い陪音が缺損するとか、又は之が少くともより低く顯著なる強さを有するといふ事も起り得る。之を例へていふと、一の調音中に於て、百の振動からの其の原音に對し、單に第一陪音及び第二の陪音が結合する。或は同一事項の言明となるのであるが、第二及び第三の部分音、隨つて百の振動の「原音」に對し、二百及び三百の振動の音が結合するのである。

ところが此の種の音は、原音に對し特に單一なる振動關係、即ち一に對する二及び二に對する三といふ關係に立つのである。此の故に此の如き調音は、それ自身の中に於て可能的に協和してある。けれども同時に、之は貧弱なる調音である。何となれば、之に於ては基本韻律のより豊富なる分化といふものが缺損するからである。此の如くある事に關しては、吾人は該當する所の感情、即ち餘りに單一にして比較的虚空といふ感情を有するの

である。

されど吾人にして今、此の如き調音中に順次により高い陪音を入り込ませて見る。或は此等がより大なる力を取得すると假定する。かゝる場合には、調音は、より豊富、より充實、より多く感興的のものとなるのである。

最後に、高い陪音にして餘りに強くなるならば、此の如き性質は、鋭くあつて、比較的の不協和、恐らくは咆哮する所のものといふ性質に迄、變化する。此の際考慮さるべきは、高い陪音は、相互の中に於て、より低い陪音よりも、より少く單一なる振動關係に立つといふ事である。之を例へていふと、第七の部分音と第九の部分音とは、七と九との關係に立つ。さうして此の如きは既に決然たる不協和關係である。けれども斯かる不協和にも拘はらず、調音全體は、かゝる不協和にして、十分なる程度に於て、より低い部分音の間に存立する所の協和といふものに從屬して居る間は、内部的に統一してあり、さうして此の結果快感を起さしむるのである。

最後に、奇數又は偶數の部分音が缺損するとか又は餘りに弱くなる場合に發生する所の音色といふものも、特別なる學述を價する。偶數の部分音、隨つて、第二、第四、第六、第八等の部分音は、相互に對し $2:4:6$ 等の關係に立つ。此の如き振動關係といふものは、奇數の部分音の間に存立する所の關係、即ち $3:5:7:9:11$ よりも、單一といふ點に於て、優つて居る。そは、二と四は、四と八と同様に、一と二に均しくあり、又四と六は、八と十二とのやうに、二と三に均しくあるからである。之に反し奇數の部分音間に存立する所の關係、例へば $5:7, 7:9, 9:11$ などば、右の如き方法に於て單一なる關係に迄還元さるゝ事は能きぬのである。

此の如くあるよりして、或る音樂上の音色、例へば一種の笛とか「クラリネット」とかの鼻聲、不和、混濁並に他の音色の一種の鳴り等の理由が、判然するのである。前者に於ては偶數の部分音、後者に於ては奇數の部分音が、全然若くは一部分缺損するとか、又はより少い力を有するのである。

第四章 音樂美學の發端的根據

一 兩數の原理

以上に於ては吾人は單一なる調音に就いて語つて居つた。然るに斯かる調音は、或る方法に於て音樂の全體を代表するのである。吾人は云うた。調音なるものは一の基本韻律の上に構成された一の韻律的系統であると。基本韻律なるものは、各個の音の韻律中に於て、大なり小なりの豊富に分化をされる。されど此の如き韻律的系統なるものは、各の音樂的全體である。之は、或る瞬間に於て與へられるとか、或は時間の中に於て發生する所の右の種類の系統であるのである。

併し之に關しては、尙一個の事實が特に眼中に置かるべくある。吾人は再び假定する。二つの同時に與へられたとか、又は繼起する所の音が、第五音の關係に立つ、隨つて振動數に關し二と三の關係に立つと。即ち一の音は一秒間に二百の振動から發生し、他の音は三百の振動から發生するとする。更に吾人は此の兩音をC及びGと呼ぶ。

此の如くあるとすると、既に述べたる如く、百の韻律といふものが、二つの音の基本韻律となる。此の如き基

本韻律が二つの音に於て異なりたる方向に分化される。けれども此の如き二つの音に於て基本律韻が分化される方法といふものは、音に異なつて居るのみならず、更に性質的にも異なつて居るのである。

前既に述べたる如く、二百の振動の音に於ては、百といふ韻律は、百の元素の繼起として與へられて居ない。之に反し、各二個の元素から成る統一體の百の繼起として與へられてある。之と同様に、三百の振動の音に於ては、各三個の元素から成る統一體の百の繼起として與へられてある。此の如くあるが故に、二つの音が同時に起生する事により、彼れに於ては各二個の元素、此れに於ては各三個の元素が、基本韻律的要素の統一體に迄、統括せらるゝのである。

ところが吾人は知得するが、同一元素の順列の各二個の元素の統括といふものは、一般の繼起的要素の統括の最も單一にして又最も自然的なる種類である。之は、それ自身の中に於て最も多く無反對性のものである。否寧ろ、之は、それ自身の中に於ける唯一の無反對性のも、或は明白なる、自然的のものである。此の如き統括法のみが、全然、同一のものゝ復起といふ原理に一致する。之に反し、各三個の元素の統括、或は五個又は七個の元素の統括は尙一層多く、——此等が、増加する所の程度に於て、右の原理に違叛するが故に、——衝突といふ要素をそれ自身の中に帶有する。吾人は之に關しては、第四篇の韻律といふ題目中に述べ居るものを讀者が想起されん事を希望して置く。

此の如くあるが故に、百の基本韻律が二百の振動の音に於て分化するといふ事は、それ自身の中に於て無反對性にしてさうして明白に自然的なる唯一の分化である。之は、基本韻律の中に、異他の何もの、或は壊亂的の何ものをも附加し居らない所の分化である。之に反し、三百、五百、七百の振動の音に於て基本韻律に附與せらるゝ所の分化なるものは、増加する所の程度に於て、基本韻律の中に、一の異他にして壊亂的なる要素、分裂或は矛盾の要素を投入するのである。

二 音樂の根本方則

上述したるものよりして、先第一に、既に説示したる事實が、可解的になるのである。即ち第八音的歩武といふものは、實の所、一の新奇なるものへの進行でなく、之に反し單により高い音調に於ける所の同一のものゝ復であるやうに見ゆるのである。

更に又、右に記述した所の情態からして、一切の音藝術に對して決定的なる次の如き事實も説明さるゝに至るのである。

二百、進んでは四百、八百の振動の音に於て與へらるゝ所の、百といふ基本韻律の分化なるものは、基本韻律の中に異他なるもの或は何等の矛盾を投入しない所の分化として、減少する所の程度に於て、正しく此の如き基本韻律の直接的代表者である。此の諸分化は、基本韻律と比較的に同一である。之は此の故に、三百、五百、七百の振動の音との同時的起生に於ては、此等の音に對し比較的の基本韻律である。之等はかゝる音に對しては基礎である。之は此等のものに對しては、恰も、靜と動、内留と發出、均衡と均衡狀態の破壊、十分なる統一と攪亂との如き關係をなすのである。

ところが、各の反對或は矛盾の中に於ては、己れ自らを消滅せしめようとの傾向といふものが、存在する。即ち均衡の破壊の中には、均衡状態に迄復歸しようとの傾向が存在する。此の如きが故に、三百、五百、七百の振動の音が、二百、四百、八百の振動の音と同時に起生するに當つては、前種の音は後種の音の方に傾向し、その重力中心として、此の音の方に追求し、又その自然的の重點として、此の音を標的とする。或は吾人が以前に使用した語句を以てするならば、前種の音は後種の音に自然に従屬をなすのである。

之を簡言すると、相互に對し $2^m : 3^n : 5^p : 7^q$ 等の關係に立つ所の諸音にして同時的起生をなすならば、後者が前者の方への自然的の傾向といふものが發生する。即ち前者に於て靜止に到達しようとの内部的運動の傾向が發生する。後者は前者をば、その自然的の基礎、自然的の重點、自然的の重力中心として、追求するのである。

勿論此の如き追求は、 n にして小であればある程、益々多く起生する。されど n は、それが0に等しくある時に、最も小くある。さうして 2^0 といふものは、1に等しくある。換言すると、此等の音の最も十全なる靜止位置と最終の重力中點といふものが、いつでも絶對的の基本韻律であるのである。

三 長音階の三音と短音階の三音

以上の如くあるよりして、吾人は先第一に、長音階の三音、例へばCEGといふものゝ特殊の性質と特殊の位置とを理解するのである。即ちGはCに對して $3:2$ の關係に立ち、EはCに對し、 $5:4$ の關係に立つ。此の故に、先第一にはG、次にはEも亦、その基礎として、Cを指示する。

此の如き指示といふものは、EとGとが、相互に對し、 $3:2$ といふ關係に立つといふ事情、隨つて、相互に對し餘りに近く類似して居らず之に反し相互に比較的の矛盾に於て立ち一が他のものゝ中に於て其の自然的の基礎を有しないといふ事情によつて、強固にされるのである。此の場合に於ても、矛盾といふものゝ中に直接に、その矛盾から脱出しようとの傾向、或はその矛盾を解決しようとの傾向が、存在する。之が爲に、二つの音が、かゝる傾向を待たなくとも既に自然的に追求するといふ音を指示する事が、増進される。——凡て此の如くあるよりして、長音階三音の特殊なる統一體と完結性、之が其の基礎たるCの上に確固且つ統一的に立つといふ事が發生するのである。

吾人は直に、之と短音階の三音のCESGを比較して見よう。此の場合には、前の場合と同様に、GはCを指示する。けれども此のGは、同時に、その基礎としてESを指示する。之に反し、今CとESとは、比較的の矛盾の關係に立つ。隨つて此の如き和諧音は、二つの脚の上に立つ。此の故に、吾人が、短音階の和諧音に接して取得する所の印象は、分裂、攪亂、比較的の不協和等となるのである。

四 旋律の根本法則

右の事が判明すると同程度に、前に與へられたる假定からして、旋律といふものゝ本質が、可解的になるのである。吾人は今、CとGとの音が繼起すると假定する。さうするといふと、此の兩音のどれが最初のものになるかといふ事は、原理上の差異を生ぜしむる。即ちCからGといふ順は、恰も靜止状態即ち均衡状態からの脱出の

て、Fの上に構成せられ、さうして此のCの上に、EとGとが直接に構成せらるゝ限りに於ては、Fは、たとひより少く直接なる方法に於てであるとはいへ、同時にEとGとに對して基礎である。之よりして、基礎としてFを有するFACEGといふ音系統が発生する。

此等二つの系統も亦、音階の凡ての音をその中に包有する。随つて音階といふものは、基礎としてCを有するCEGH Dといふ系統と、Fを有するFACEGの系統との二個の系統に迄、分裂する。各の音は、それが屬する所の基礎をば、その基礎として指示する。此の故に、若しも吾人にして、音階の此等凡ての音から一の旋律が構成さるゝと思念するならば、相互に繼起する所の音といふものは、一方に於てはC、他方に於てはFをば、その自然的の基礎、或はその自然的の重點として指示し、此の方に向進せしむるやうに見ゆるのである。

先第一に、實際に於ては、事實關係は此の如くにある。即ち旋律にして、CEGH Dの音に於て運動し居る間は、之はCの範圍中に存する。或はCの統配の下に立つ。次に、FとAが加はる事により、之は、Cに對して異他である範圍の中に入る。即ち之は、Fの統配範圍中に引入られる。さうして之に於て特に留意すべきは、C自らが、旋律をば、Cに對し異他である範圍中に移行せしむべく適當してあるといふ事である。

次にかゝる言明に對して吾人は尙附加せねばならぬ。HとDといふ音は、直接にCに於てはなく、之に反しGに於てその自然的の基礎を有すると。之の限りに於ては、Gも亦、旋律中に於ける基礎即ち基本韻律、更に簡言すれば統配的元素であるべき要求をなすといふ事である。

此の如き全體の事實關係といふものは、通常次の如き事によつて承認される。それは、GとFとをば、音階並にその音から成立する所の旋律中に於て、統配音、而も前者を上方統配音、後者を下方統配音と呼ぶといふ事である。

此の如き「統配音」即ち、音階中に於て支配をなす所の音に對し、容易く知得される如く、第三のものとしてCが現出する。されど此のCは、その顯著なる位置の爲に、——此の事に就いては後になつておきに述べる——統配音でなく、主調音と稱せられる。

六 旋律の本質

旋律とは、單音或は調音の繼起から發生或は構成せらるゝ所の音韻律の系統である。統一的に完結された韻律なるものは、此の如き種類の統一的にして完結された系統であるのである。

されど之に迄は、全體の韻律を統配する所の一の基本韻律といふ統一體が必要である。かゝる統一體といふものには、その性質上、主調音たるCが、確定されてある。旋律なるものは、此の如き主調音、即ち此の如き基本韻律から、直接に出發する。或は之は、基本韻律をば、類似し居つてさうして其の基本韻律に向注する所の音——その中でも第五音のG——を通して、誘導する。次に、旋律は、此の如き基本韻律、基礎、均衡状態を放棄しさうして矛盾、分裂、反對といふものを、己れの中に受納する。けれども之は、此等を打破する爲に此等を受納するのである。即ち韻律が此の如き打破をなす事により、之は、主調音をば、徹底的無二の統配に達せしめ、さうして之と共に、始めて之をば眞に「主調音」たるに至らしむる。旋律なるものは、此の如き分裂と調和との歴史

である。即ち彼れが如き衝突及び打破の歴史であるのである。

ところが斯かる歴史といふものは、より單一なるものである事もあれば、又より少く單一なるものであり、更に長いものである事もあれば短いものである事もある。打破せらるべき反対は、單一なるものでもあれば又複雑なるものでもある。運動は、單一なる方向に於て矛盾の中に入りて後解決さるゝ事もあれば、又順次に多様なる方向に於て此の中に入りて解決さるゝ事もある。此の運動は、最も單一なる道程に於て矛盾を解決するか又は之若くは彼の迂路を辿りて解決し、或は之を一度に解決するか又は段階に於て解決するかである。

既に主調音の第五音及び第三音は、吾人が知得する如く、「均衡状態」の消滅或は比較的の矛盾といふものを意味する。旋律が此の如き矛盾の中に入り、さうして斯かる矛盾から己れ自身に迄復歸する事により、最も單一なる旋律が発生する。

更に他方に於ては、旋律が、全音階の音を越えて、「音階に異他なる音」に迄進み、かくて矛盾及びその解決の可能を増加する事がある。解決なるものは、いつでも其の特殊の性質に於ては、矛盾の種類に一致する。

又短音階は、長音階と比較して見ると、矛盾及び解決の特異にして別個なる可能をその中に包有する。

併し吾人は茲では、先第一に、一方に於ては凡ての音から成立し、他方に於ては同時に唯長音階の音から成立する所の旋律に就いて、専ら語つて見ようと思ふ。

七 全音階より成立する旋律

以上のやうな旋律に於ては、上述したるものに基き、その中でも三個の音の反対が存立するのであつて、此等の音は、韻律的系統の統一的の基本韻律を代表すべき要求を提出する。而も、旋律なるものは、かゝる基本韻律の繼起的の構成から成立するのである。今やC G Fといふ三個の音が、韻律的系統中に於ける統配者、或はそれの徹底的なる統一的基礎といふ名譽を得べく争闘するのである。

されど此の際に於ても、CとFとの反対が、根本反対として出現する。此の如き反対の和解或は此の如き争闘の打破の方法といふものは、矛盾から並に矛盾を通しての、韻律的系統の統一體の發展、換言すれば旋律といふものゝ發展に對し、特に決定的のものである。之は同時に、一般的の矛盾の解決といふものに對し、範型的のものであるのである。

併し吾人は、より單一なるものを以て論究を始める。先第一に、第五音と大なる第三音、随つてC調長音階に於ける旋律といふ假定の下に、GとEが旋律中に入り居ると假定する。此等のものは、直接にCを指示する。さうして若しも此等兩者が與へられてあるならば、既に上に概説した理由からして、強められた力を以て指示する。EとGは、 $\text{E} \cdot \text{G}$ のといふ其の關係の爲に、相互に對し比較的の不協和である。さうして又、此等は、一の音がそれに對し基本韻律である所の他の音を指示するといふやうな方法に於て、他の音を指示しない。

次に吾人は、CEGといふ音に對し、更にHとDといふ音を加はらしむるとする。今やGは、此のHとDとに對し、直接の基本韻律となる。けれども運動は、此等の音からして、最も直接なる方法に於てCに迄復歸せしめられ得る。先第一には、Gが、最も直接なる方法に於て、その基本韻律に迄Cを有するといふ事情の爲にかくな

る。第二には、HとDとは、よしやより少く直接的であるとはいへ、音に基本韻律に迄Cを有するのみならず更に此等が、音階中に於てCに直接に隣接してあるといふ事情の爲に、かくなる。此等二つの事情の爲に、既に述べたる如く、運動といふものは、特に自然的なる方法に於て、H及びDから、隣接せるCに迄進む。HとDとは、特に無強制に、さうして同時に直接的に、Cに迄移行せしめたり或は復歸せしめたりするべく適當してある。此の故に、此等は、Cに迄の「指導音」と呼ばれる。最後に、HとDは、相互に對し、EとGのやうなGとEといふ同一の關係に立つ。さうして此の如くあるといふ事は、此の場合に於ても亦、此等の音の同時的生といふものは、特殊の力を以て、兩者がその性質上誘入し得るといふ音に迄向進せしむる。さうして此の如き音たるものは、一方に於ては間接にGを通し、他方に於てはCに迄のその隣接の爲に、Cといふ音であるのである。

ところが凡て此等の機縁からして、如何にしてGが、その統配上の要求を現實にした後に、その要求を忽ちCに迄讓渡し得るに至るかが、可解的になるのである。

八 主調音と第四音との反對

既に述べたる如く、右に假定したやうな種類の旋律に於ては、その中でも、一方に於てはC他方に於ては其の第四音随つてFとの間の反對といふものが、典型的のものである。Fといふものゝ統配上の要求は、一層多く斷乎たるものである。さうして之が故に、打破の一層多く斷乎たる手段を要する。されど此の手段が一層多く斷乎

たるものであるとはいへ、尙之は、「上方統配音」たるGといふものゝ統配要求の打破の上述せる手段と、同種類のものである。併し吾人は、此の場合に於ては、特殊の重要な爲に、此の事實關係の中により詳細に立入つて考察する。さうするといふと、同時に、右に述べたるものは一層判明になるのである。

蓋しCとFとの反對が和解されずに存立する間は、音階の凡ての音からの統一的旋律といふものは、發生する事が能きない。旋律は、此の反對の爲に、先第一に二分割されて見ゆる。之は、CとFといふ二つの基礎、目的點或は靜止點の間に、浮動する。

此の逆に、此の如き反對にも拘はらず一の統一的旋律が發生すべくあるとすれば、かゝる反對が打破されねばならぬ。即ち一方に於てはCといふ基礎、他方に於てはFといふ基礎の方への旋律の追求の矛盾が、解決されねばならぬのである。

ところが此の如き解決は、三種の事實狀態の力によりて遂行され得るのである。第一には、音階中の音が、Cに對し、全體中に於て、音階中の其他の音に對するよりも、より密接なる關係に立つといふ事である。即ち第四音のFと第六音のAは、Cと密接に近接する。FはCに對し、AはCに對し、Gの關係に立つ。勿論他方に於ては、音階中に於て、Cに對しより少く近接せる關係に立つ所の音もある。即ち第二音のDは、Cに對し、Eの關係に立ち、さうして大なる第七音のHは、之に對し、Eの關係に立つのである。

されど第二に、吾人は既に知得したのである。此等二つの音、即ちCへの「指導音」といふものは、Cに迄誘導

するべく特に適當してあるといふ事を。

之に反し第三には、F並に之と共にAは、同一の音のDとHとに對し、不協和の關係に立つ。即ちFはHに對し45:32、Dに對し27:32の關係に立つのである。

此の如く述ぶると共に、右の三種の事實状態といふものは、説示される。吾人は此等の點を尙一度順次に數へ上げて見よう。即ちF、進んではAは、Cに、最も近く接して居る。次にHとDはCへの誘導音である。第三にF、並に之れと同時にAが、かゝる誘導音に對し、不協和の關係に立つのである。此の如き三様の事實關係は、CとFとの反對、並に基礎としてC及びFを有する彼れが如き二つの系統の反對といふものをして、和解され得るに至らしむる。併し和解といふものは、Cに有利なるやうに起生する。吾人は之に關する事柄の進行を次に略説する。

假りに、FとA、或は兩者の一に對し、H或はD、若くは此等兩者が現出するとするならば、然る時には、既に述べたる如く、彼れと之との間に、一つの不協和といふものが生ずる。されど斯かる不協和は、己れ自身からして解決に向つて進む。さうして解決の通路といふものは、一方に於てはCに對しての、FとAとの關係、他方に於てはHとDとの關係によつて、表示される。さうして此のやうに存立する關係といふものゝ意味は、前者は、Cに對し特に密接なる近接關係に立ち、後者はCへの自然的の誘導音であるといふのである。此の如くあるよりして、彼れが如き不協和からCへの進行の必然性といふものが、發生する。即ち不協和は、己れ自身からして一義的方法に於て、運動をばかゝるCに迄誘導するのである。

此の如きが故に、HとDとを通じて、運動といふものが、Fの範圍からCの範圍に迄移導せらるゝのである。Cと並列して全體といふものゝ統配者にならうとのFの要求は打破せられ、さうしてCに對し獨占的の統配權が確保される。Cといふのが全體の中に於て取得する所の此の如き位置の爲に、Cが始めて全體の主調音と呼はるゝのである。

九 統配的第七音の媒介的任務

右に言明したる事項の中には、尙一つの缺陷が存在する。吾人は右に於て、如何にして、FといふものがCに從屬し、さうしてその統配權の承認或は確保をなすに至るかを、理解した。けれどもFが如何にして一般的に旋律の中に入り來るであらうか。由來旋律なるものは、いつでも一の統一的にしてさうして内部的合法性を以て進行する所の全體である。之に於ては、到る所、必然的に一といふものは他のものから發展する。即ち一は他に迄到達する。此の如きが故に、旋律も亦、Fに迄到達せざるを得ない。かゝるFが、云はゞ一の異他なる世界から入り來るなどといふ事は、能きない。

ところ吾人は既に知得した。Cといふものは、その基礎としてFを指示するといふ事を。けれども此の事では十分しない。更に、第五音の上の旋律的系統から、Fに迄の内部的の連絡と自然的の進行も、必要であるのである。

然るに此の種のもは、若しもFがGの自然的の第七音と解釋せらるゝならば、與へらるゝのである。

此のFは、Gに對し、7:4の關係に立つ。第五音のG、進んではHとDとの音、最後にはGの右の如き自然的の第七音は、相互に對し、4:5:6:7の關係に立つ。之は、合體して「統配的第七音和絃」といふものを生ぜしむる。

ところがGの此の第七音といふものは、第四音と一致する。或は之をより精密に云へば一音階丈高められた第四音—Cのと殆んど一致する。假りにCが二十四の振動の音であるとする。さうすると、右の第七音は、六十三振動の音である。此の第七音とは、右の第四音は、一振動丈異なつて居る。即ち此の第四音の振動数は、右の假定の下では、六十四であるのである。

さうして之に關しては、一の規則が成立する。より少く區別された音といふものは、相互に對し代理となり得ると。或は同一の音は、順次に、一つの音、並に之とより少く異なりたる音として、官能する事が能きる。假りにG—H—dといふ一列が興へられてあると定め、さうして今fが繼起するとする。然る時には、疑もなく此のfは、Cの第四音としてではなく、之に反しGの自然的の第七音として取られねばならぬ。之は此のやうなものとして働く。さうして此の如くなると共に、fは、全然自然的なる方法に於て誘入される。今や運動は、全然自然的に、fに迄進行する。然るにCの第四音としてのfに迄は、運動が、G—H—dから直接に誘入さるゝ事が能きない。

ところが此のfに對しても亦、Gの上の韻律的系統の音中の一、隨つてG自體、或はH或はDが、繼起すると假定する。此の如き音の各は、Cを指示する。さうして之により同時に、前行する所のf或はFが、同時的規定をされる。之は云はゞ變形的規定をされる。之はかゝる指示に適合をする。之は、かゝるCに關しては、もはやCに迄不協和にある所の—即ち 63:24 或は 21:16 又は 21:8の關係に立つ所の—Cの自然的の第七音として働かない。之に反し、Cの第四音、隨つてCに對し 64:24 或は 8:3 又は 4:3の關係に立つ所の音として働くのである。

之と同時に、Fは、HとDとに對して向注する。されど正しく此の如くなす事により、之は、HとD、又はGと合體して、必至的に、運動の靜止點としてのCに迄誘導をする。

此の如くして、Fといふものゝ二重の位置は理解され得るやうに見ゆる。詳言すると、之が、順次に、一の音並に之とより少く異なりたる音として働くといふ可能、即ち一方に於てはGから旋律中へのFの取入れ、他方に於てはFからCへの進行、並にFをば全體の旋律のかが如き基本韻律の下へ從屬せしむるといふ事が、理解され得るやうに見ゆるのである。

Fの此の如き二重の位置といふものも亦、類似せる二重位置、或は音の類似的に繼起する種々の官能に對して典型的にある。「整調された調子」に於ては、容易く知得ざるゝ如く、此の如く僅少に異なりたる音の區別といふものは、客觀的に調停されてある。今や兩者と異なりたる唯一個の音が、此の代りに現出する。然る時には、かゝる一個の音が、兩者の代りに官能するのである。

十 旋律の分員、補説

吾人が既に説示したるやうに、旋律といふものは、全體に於て、和諧音例へば三個音と同様に、音韻律の一の系統である。たゞ繼起的に發生しさうして豊富化する所の系統である。之は、全體の基本韻律であるべき要求を並列的に提出する所の種々の韻律の反對及び争闘から成立する所の系統である。即ち多様に分化しさうして益々豊富に分化する所の韻律の運動であつて、此の運動たるや、右の如き争闘の進行中に於て、一の統一的韻律を優勝せしめ、さうして凡ての韻律に對する基礎としての斯かる韻律中に於て閉鎖しながら、統一體に迄總括せらるゝのである。

かゝる韻律的全體が發生するに至る所の道程といふものは、部分と音律と段落とに迄、分員される。音律の中に於ては、既に吾人が曾て談話の各個の語に比較した所の、密接に關連せる音の統一體といふものが、發見される。旋律なるものは、各個の音律に於て、徹底的統配に迄規定された基本韻律に近接したり、又は之から遠隔したりする。之は、停止點又は比較的完結の點に到達する。今や切目や停唱が發生する。之は、目的の方への直線の周圍に搖動する。之は、運動を反復したり之を變化したり反對的運動を實行したり、さうして此の如くして最後に、徹底的の均衡状態に到達する。——此の事に關しては、余は茲で詳細の點に立入る事は能きぬ。此の事實關係の一部分精密なる説示に對しては、余は、曾て心理學雜誌に登載せる「旋律の理論」といふ余の一文を紹介して置く。

たゞ二三の補説を茲に擧述して見よう。繼起的に發生する事により旋律といふものを現出せしむる所の音韻律の系統といふものは、既に説示せる如く、豊富多様化し、さうして同時に、若しも旋律の中に、音階に異他なる

音、例へばC調長音階中に嬰音が加入する場合には、上述の如き反對及び争闘といふものは、多様化される。

旋律の進行及び完結により形成せらるゝ所の統一體といふものは、若しも長音階といふ音調の代りに短音階といふ音調が入るならば、既成的の旋律中に於ては、より少く完結せられ、比較的攪亂せられ、分裂といふ要素を帶有するものゝやうに見ゆるのである。

以上に於ては、いつでも、旋律が單音から成立するといふ事が假定され居つた。けれども音樂なるものは、既に述べたる如く、調音を以て動く。さうして此の調音なるものは、それ自身に於て既に音韻律の統一的系統である。かくあると共に、旋律なるものは他の方向に於て豊富化される。その相互的附加により、唯一の基礎の上に立つ所の統一的系統を發生せしむる所のものは、韻律の系統であるのである。

更に、旋律に對し、諧音が加入するとか、又は並列する所の旋律が一個の全體に迄結合せらるゝ事により、系統は豊富化される。

されど此の場合に於ては、尙一個特殊の見地が問題となる。若しも音の幾多の列又は幾多の旋律が並列して與へられ、さうして此等のものが統一體に迄結合せらるゝならば、此等のものゝ中の一が、統配的の旋律、或は唯一的の旋律として現出せねばならぬ。此の際、上述したる所に基き、若しも「奉仕」即ち從屬をなす所の音の列にして、同時に比較的に獨立せる意義を有し、隨つてそれ自身に於て、繼起的に發生して比較的に獨立せる韻音律の系統として表現するならば、積極的の美的意義を有するのである。

但し此の如き「奉仕」は二種のものの意味し得る。第一に、之は、音の「統配的」列の纏絡、多様化、豊富化、修

飾といふものから成立する。第二には、音の從屬的の列は、全體といふ統一體のより強固なる接合に役立ち得る。此等は基礎に迄結合し、靜止、又は全體といふものゝ均衡状態に向つてのより靜穩なる運動を表現するのである。

十一 音列の高低

右の場合に於ては、高さと低さといふものとの反對が、同時に重要になる。本來低さなるものは、靜止に類似して居る。否之は、それ自身に於て靜止である。此の故に、靜穩なる基礎、統一化する所のもの、均衡状態に迄結合する所のものは、自然に、低さに向つて追求する。之に反し、可動的のもの、内部的合法性を以て統配者に迄規定された音韻律をば、全體といふものゝ統一的に閉鎖する所の基本韻律となるに至らしむるが如き活動、交代及び鬭争、簡言すれば旋律といふものは、高さに向つて追求する。

運動といふものが靜止に向つて追求し、一の基礎の上に構成された系統の全體が、基礎に向つて追求し、さうして自然に之に従屬する限りに於ては、旋律なるものは、より低い音列或は聲に従屬するやうに見ゆる。實際に於て、此の種類の從屬といふものは存立する。されど吾人は、此の所に於ても、吾人が上に語つた所の二重の從屬といふものを區別せねばならぬ。吾人は既に知得した。より多く專制的なる從屬と、より多く自由なる從屬との兩反對が存立するといふ事を。此の如き反對は、今の場合に於ても成立する。低さといふものは、高さよりも一の優位を有する。されど高さも低さよりも一の優位を有する。高さなるものは、より多く進透的である。之は注意をばより高度に緊張せしむる。かくて之は、全體をば從屬に迄強制する。之に反し運動といふものは、それ自身から、靜止、隨つて低さに向つて追求する。

此の如きが故に、從屬を起生せしむる所の二つの方向なるものが、對立する。全體といふものは、此等の間に浮動する。之は、高さと低さ、最大の運動及び緊張と靜止及び統一との間に浮動するのである。

されど最後に、此の如き反對といふものは、旋律が、同時に全體といふものゝ統一點である所の終結點に於て閉鎖的に總括せらるゝ事により、解除せらるゝのである。

十二 音韻律と大規模の韻律

各個の音といふものは、上述したる所に據ると、是韻律である。さうして各の音は、全體に於て、基本韻律であるか、又は基本韻律の分化である。さうして全體といふものは、韻律の一の統一的の系統であるのである。

次に此の外に、大規模の韻律、即ち音の合法的繼起、排列、分員なるものが現出する。蓋し、音並に音結合といふものが、之を別にして既に韻律であるといふ事は、「大規模の韻律」をば、最も直接なる方法に於て音全體に迄適當し居るやうに見えしむる。之は、既に音の中に於て與へられたるものゝ自然的の連続である。

さうして今や又明瞭になるのは、何故に此の如き韻律が時間測度的韻律でなければならぬかといふ事、即ち何故にその根本原理が、同一のものゝ復歸といふ原理以外のものである事が能きぬかといふ事である。かの音の韻律も亦正しく時間測度的の韻律であり、さうして一の規則正しき時間分割をその中に包有するのである。

右の如き大規模の韻律の合法的分員に迄、音楽上の成員、直接に關連せる音の繼起、單語、文章、句讀といふ

ものが、第四篇の第九章に於て簡単に説示された方法に於て、適合するのである。

十三 發表としての音樂

右に於ては、音樂的全體の要素といふものが、今此の所で唯一的に企圖し居る所の概説的方法に於て、音樂を、身體と見做す程度に於て、説示された。けれども音樂なるものは、尙此の外に精神でもある。即ち音樂といふものは、音や音結合や旋律や諧音や音の韻律以上のものである。之は、凡ての美と同様に、生活といふものを發表するものなのである。

既に各の單音、並に當然の結果として各の調音は、此の如く生活を發表するものである。吾人は上に會て、「力強い」色といふものに就いて語つた。今や之に對し附言せねばならぬ。色に就いて成立する所の事項は、「力強い」單音或は調音に就いても成立すると。此等の音の「力」なるものは、吾人の意志或は行爲の力である。けれども特異なる方法に於て、色或は單音又は調音の中に感じ込まれる。

されど此の場合の音に於ては、尙一つの動力に迄、特に指示されねばならぬ。吾人は、吾人の内部的興奮に對し、色によりてははなく、之に反し音聲により、直接なる發表を興へる。此の如き音聲は、場合により多と少との差異こそあれ、音樂の單音及び調音に類似して居る。さうして此の如きが故に、此の單音及び調音も、亦、色よりもより直接なる方法に於て、一の内部的のものゝ發表であるやうに見ゆる。此等に於ては、直接に、一の内部的のものが告知せられ、感情的要素、内部的渴望、一の欲求或は意志が、流出したり、又は、空氣を呼吸したり

するやうに見ゆる。之と同時に、單音或は調音の力といふものは、彼れが如き渴望、欲求或は意志の力であるやうに見ゆる。

彼れが如き欲求或は意志、彼れが如き流出或は發動といふものは、單音或は調音のそれ／＼の性質に應じて、それ／＼異なる。そこで此等は、音に、高聲の音に於てより強烈なるもの、低聲の音に於てより溫柔なるものであるのみならず、更に同時に、低い音に於て、より靜穩、廣濶、鈍重であり、高い音に於て、より急激、より少く鈍重、その代りに「より鋭く」して且つ「より多く刹那的に」ある。吾人は、調音が有する所のそれ／＼の音色に應じ、右のものをば、より單一或はより豊富なるもの、より多くそれ自身の中に於て一致せるもの、或は比較的それ自身の中に於て分裂せるもの等と感ずる。吾人は都合によると、調音をば、歡呼するもの或は愁歎するものなどとして感ずる。

さうして右の如き欲求、右の如き意志、右の如き流出といふものは、單音或は調音が、同量的に進行するか、又は膨大するか若くは縮小するか、或は長く續くか短く續くかに隨ひ、それ／＼異なりたるものとなる。

吾人が、各個の單音或は調音中に於て體驗したり又は體驗し得たりする所の生活といふものに對し右に附與した所の實辭と共に、吾人は同時に、「氣分」といふものゝ範圍中に移行するのである。單音或は調音中に於て表現されてある所の精神的興奮の種類も亦、精神全般の中に「發出」するべく進求する。或は全精神を己れの方に「韻律附けるべく」追求する。精神的興奮の如き一般的韻律、簡言すれば單音或は調音を抱擁し居る所の此の如き氣分といふものは、かゝる場合には、右の單音或は調音そのものゝ中に存在し居るやうに見ゆるのである。

十四 内部的運動と氣分

單音や調音の中に於ける凡て以上の如き生活といふものは、若しも吾人にして、此等をばその結合に於て觀照するならば、増進せられ、さうして無限のものに迄多樣化される。吾人は、把握或は統覺をしながら、音から音に迄移り行く事により、之々の性狀づけられた内部的運動を遂行する。かゝる運動は、先第一には吾人の運動、即ち吾人の統覺的の行爲である。けれども之は、音並にその列に迄結合されてある。さうして此の如くあるが故に、吾人が一の空間的の形に接するとか又は詩的韻律を體驗するとかの中に於て遂行する所の統覺的運動と同様に、之は、音の列の中に存在するもの、此のもの自身の中に於て行はるゝ所の運動として現出するのである。ところが此の如き運動は、最も多く異雜なる種類及び韻律のものである。さうして斯かる韻律も亦、此の運動に對し、一般的の心的反響を作出する。

即ち茲にいふ運動は、それ自身に於て一致するとか又はより少く一致し、より協和或は不協和であり、協和音に於て進行したり、又は長いか短いかの道程に於ける不協和から、媒介的或は無媒介的に、より多く十全又はより少く十全に解決せらるゝ所の協和音に迄、到達したりする。同時に、かゝる運動中に於ては、音といふものは、強力又は溫柔に現出し、膨大したり縮小したり、豊富なる全體又はより少く豊富なる全體に迄結合される。之は、迅速或は緩漫、大なる反對或は小なる反對、輕快なる移行又は急激なる移行に於て、前進する。

ところが此等凡てに對し、當該的の心的反響が一致する。否、體驗の茲にいふやうな要素或は方法といふもの

は、吾人の他の生活に於ても發見される。吾人は例へば、最も異雜なる形に於ける不協和の解決を知得する。吾人は、若しも太陽が雲を破りて出づるとか、爭論が沈靜せらるゝとか、物質的の急迫から解放せらるゝとか、疑惑が排除せらるゝとか、内部的争闘が解決せらるゝとかの場合には、右のやうなものを體驗するのである。

さうして之と同様に、音運動の中に存在し得る所の内部的現象の以上の外の方法と云ふものも、吾人の體驗の凡ての範圍に於て吾人に知得されてある。

此の如きが故に、吾人の中に、可能上無限に多くの想起や表象や思想が存在し、さうして此等のものは、それ自らの性質上、音並に音の中に於ける運動の全體といふものが爲すと同様の方法に於て、吾人の中に於て經過し吾人を興奮せしむる事が能きる。かくて吾人は言明する事が能きる。吾人の中に、可能上、いつでも、聽取された音に類似する所の多くの「音」が存在して居つて、さうして吾人の中に於て響くべく用意してあると。

さうして此の如く用意してあるが故に、聽取された音並にその中に存する所の精神的運動の種類が有するそれ／＼の興奮力に應じて、高聲式或は低聲、豊富或はより少く豊富に、右の音が響くのである。此等凡ての孰れもが、個々に於て吾人の意識中に到達しない。之が並列して響く事により、之は一の共通的の氣分に迄凝結するのであつて、かゝる氣分は、一の氣分的感情、即ち全體の内部的生活々動の特定の種類の感情となつて、吾人の意識に報告せらるゝのである。

此の如き氣分も亦、音に迄結合されてある。之は、音の中に存在し、さうして上述の如き類似の爲に音に迄附屬する所の運動の發出である。吾人が音を聽取する事により、且つ吾人が此等の中に停留没頭する程度に於て、

吾人は、氣分を體驗し、且つ氣分の中に於て、且つ之と共に、音の中に於て、體驗し得るのである。かくて吾人は、音の中に於て、激情と沈靜、憧憬と平和、歡呼と愁歎、嚴肅なる意志と輕易なる活動、争鬪と講和とを發見するのである。吾人は音の中に於て、吾人自らの理念的自我を發見するのであつて、かゝる自我たるや、音並にその音の和合や繼起から、吾人に迄語り、或は此等の中に於て發言する所のものなのである。此の種の自我たるや、吾人自らである。即ち音の中に感じ込まれた自我であり、音に表象され居るのみならず、更に現實的なる自我、即ち事實的に體驗された自我であり、繼起的に發生して構成せらるゝ所の音全體の中に於て、己れ自身の中に於て完結に到達する内部的歴史を體驗する所の自我であるのである。

第五章 言語の象徴法、聽覺的元素と形式的元素

一 情緒上の音聲

感官的に可知覺なるものゝ範圍の中で、言語の如く多様な感情移入を許容するものはない。「徵象法」といふ語が此の事に關して有する意義に就いて曾て注言した所のものに據ると、此の斷言は、吾人が次の如く言明すると同一のものである。曰く、言語なるものは、凡ての感官的可知覺のものゝ中で、最も多様な象徴法を有する。之は敢へて驚くに足らない。何となれば、言語なるものは、人間の精神的の生活發現の特別の手段であるからである。更に又、廣義に於ける言語に迄、前に曾て簡單に觸れた事のある情緒上の音聲が附屬する。

吾人は他人の情緒上の音聲を理解する事が能きる。何となれば、吾人自らの中に於て、先天的或は「本能的」の告知衝動といふものが、存在するからである。吾人は本能的に、歡樂、痛苦、恐怖等を告知する。詳言すると、吾人は此のやうな情緒を體驗し、さうして斯かる情緒は、音聲を發するに至る所の運動といふものを解發せしむるのである。而も此の如く述ぶると共に、三個の體驗が説示される。併しかゝる體驗は唯一的の總體驗なのである。

さうして今吾人が、一の同種なる音聲を聽取すると假定する。之と共に、右の如き總體驗の一部分が再び與へられる。されど斯かる部分の中には、全體に迄已れを完成しようとの傾向が存在する。詳しくいふと、吾人の中に於て、運動の再度の實行、並にそれと同時に情緒の再度の體驗に迄の傾向といふものが、發生する。此の如き傾向は、若しもそれが實現し得るならば、實現される。尙此の事に關しては、曾て前に述べたものを比較される事を讀者に希望し置く。

本來、聽取した情緒上の音聲に該當する所の情緒を吾人の中に於て體驗しようとの傾向の内部的に無妨害なる實現といふものは、情緒上の音聲中への積極的の感情移入と同意義である。吾人は、例へていふと、實直なる歡樂の音聲とか心から來る所の快活なる笑ひとかを聽き、さうして吾人を心持よく感ずる。而も一般的にかく感ずるのでなく、之に反し右の如き方法に於て其歡樂を表現する所の人間の中に於て感ずるのである。今や吾人に對し、笑ひの中に於て、可感的にしてさうして事實的に感ぜられた歡樂といふものが、存在する。吾人は、此の如

き笑ひの中、並にかゝる笑ひに對しての打任せの中に於て、歡樂といふのを共同的に體驗するのである。吾人は之と同様に、積極的に、純眞にして人間的に正當なる苦痛の發表の中に吾人を感じ込む。されど最後に、吾人は消極的に、輕些なる憤怒、抑制された激昂等を告知する所の音聲の中に感じ込むのである。

二 言語上の音聲

狹義に於ける言語の理解の問題といふものは、右の情緒上の音聲の理解の問題よりも、より少く單一であるやうに見ゆる。されど今茲では、吾人は、言語といふものゝ起源に迄立戻らない。之に反し單に、既成的言語の中に生れ入りて吾人が取得するといふやうな言語の理解に迄、思念する。此の如き理解に對しても亦、必然的の基礎たるものは、かの告知衝動である。たゞ斯かる衝動は、茲では一歩進んで、一般的の内部的體驗を告知する衝動、並に他人の音聲中に於ける他人の體驗を宣示すべき衝動と解釋されねばならぬのである。

かの幼兒は、主として遊戲的に、あらゆる種類の音聲を發し、情緒上の音聲と稱する事の出来ないものをも發する。彼等は、之をば、自動的或は「反射的」になす。此の事は先第一に、彼等が、一の盲目的衝動の爲に言語器官の運動をなすといふ事を意味する。さうして此の如き運動からして、音聲が發生する。

されど此の如き音聲が運動に對して附加さるゝ事により、兩者は一の統一的の體驗に迄結合される。さうして爾後、此の音聲若くは類似せる音聲の知覺は、當該的の運動を再び實行すべき傾向を喚起せしむる。

そこで幼兒が單語を聽取すると假定する。之は、彼等が發せしめた音聲とは、異なりたる音聲である。けれども之は、彼等の音聲に大なり小なり類似して居る。さうして之が類似してある程度に於て、之は、彼等幼兒の既に習熟し居る音聲運動の實行に對する傾向を喚起する。同時に、之が彼等の音聲と異なつて居る程度に於て、之は同時に、一般的の音聲運動に對する傾向でなく、之に反し右の如き音聲運動の實行に對する傾向に、反對的に働く。換言すると、之は、かゝる運動を變更すべき傾向を喚起する。即ち運動衝動が、差異の爲に轉向せらるゝのである。

此の事をば吾人は、「下稽古」と稱する。幼兒なるものは、聽取した音聲を模倣するべく「下稽古」する。此の如き模倣は、始めには成功しない。既に習熟せる音聲運動の變更は、何等かの新なる音聲に迄到達する。されど聽取された音聲といふものは、常に變更を促がすやうに働く。而も一般的に働くのでなく、之に反し音聲が、未だ聽取されたものであらぬ程度に於て彼れが如く働くのである。最後に、幼兒は、此の如き方法に於て、事實的の模倣に迄到達する。

ところが之と共に、吾人は、音に一般的に音聲を發するのみならず更に體驗といふものを告知すべき衝動を結合せしむる。幼兒は一の事物に注意せしめられる。彼等は此の事物の形相を取得し、一の事物を把握する。之は一個の特殊なる體驗である。さうして斯かる體驗を告知するべく幼兒は欲求する。

然るに幼兒が事物を把握しさうして之に關する欲求を體驗すると同時に、彼等は、大人が用ゐて以て事物を指示する所の單語といふものを聽取する。さうして若しも幼兒に對し、此の如き單語の模倣が成功し、隨つて彼等

の中に於て、右の「下稽古」を基礎として、かゝる單語或は音聲復合體の形相が、當該的の運動と結合されたならば、幼兒に對し、單語の知覺中に於て直接に、彼れが如き運動の實行に對する傾向といふものが存在するに至るのである。

随つて今や幼兒の中に於ては、同時に二つの傾向或は欲求といふものが存立する。一つは事物の把握を告知しようとの欲求であつて、一つは聴取した音を模倣的に發音しようとの欲求である。此等二つの欲求は結合される。否寧ろ、此等は結合さるゝのを要しない。兩者は、それ自體としては實に同一の欲求であるからである。蓋し、特定の事物の把握の働作を告知しようとの欲求も、是音聲を發しようとの一の欲求である。此の如き欲求は、たとへば聴取した單語を模倣的に發音しようとの欲求によつて、或はかゝる單語の中に於て、その特定の内容を取得する。即ち之が、かゝるより具體的なる形體を取得するのである。之が結果といふものは、事物の把握をかゝる特定の方法、即ち聴取した單語の模倣によりて告知しようとの欲求であるのである。

ところが此の如くなると共に、事物は、幼兒に對しその「名稱」を有し、さうして單語は、その物象的の「意義」を取得する。一の事物が特定の名稱を有する、或は「之々と呼ばれる」といふ意義は、吾人に對し、一の事物の把握中に於て、かゝる把握、或は事物といふものゝ吾人の内部的所有をば、特定の音聲復合體の發生によつて告知しようとの欲求、衝動、強制が存するとの意識から成立する。之は、一の把握働作に對し一の告知作用が此の如く「附屬」といふ意識から成立する。さうして一の單語が一の事物を意味するといふ意識は、該單語が一の事物の内部的把握を「意圖する」、即ち之の發音にかゝる事物を内部的に把握しようとの傾向或は強制が存するとの意識から成立するのである。

茲に及んで吾人は直に一步を進めねばならぬ。幼兒なるものは、一の事實關係に就いて確信を起す。即ち一の判斷を下す。同時に彼等は一の文章を聴取する。此の場合には、判斷と稱せらるゝ内部的體驗の告知の欲求と文章を模倣的に發音しようとの欲求とが、結合されて、文章により判斷を告知しようとの一つの欲求となるのである。或は再びより正しく言明すると、右の甲の欲求は此の乙の欲求により、その特定の内容を受納するのである。かくなると共に、文章といふものは、かゝる判斷に附屬する所の發表、或は「宣言」といふものになり、さうして文章は、かゝる判斷中に於て、それに迄屬するその「意義」を取得するのである。

三 感情移入としての言語理解

此の題目を深く立入つて吾人は攻究しない。上述したる事項は、之に關する所のものを認識するのに十分する。さうして其の事項とは次の如きものである。曰く、一つの單語又は文章を知覺して言語を學習する事の中には、直接に、事物の事實的の内部的把握、それに對する吾人の知覺或は表象、又は吾人の事實的の判斷といふものが結合し、決して事物が把握せられ又は判斷が下されたとの單なる表象が結合しないと。單語或は文章、並に事物の吾人の事實的の把握、又は吾人の現實的の判斷といふものは、唯一にして統一的なる體驗となるのである。

此の如きが故に、爾後、吾人に對しては、常に聴取された單語中に、直接に、それによつて表示された事物の事實的の内部的把握といふものが、存在する。之と同様に、聴取された文章中には、事實的の判斷が存在する。

吾人が一の單語を聴取する場合には、吾人は常に、發語者が一つの事物を内部的に浮出し或は之を表象するといふ事を、吾人に對し表象するのみならず、或は此の如き事を知得若くは知得すると信ずるのみならず、更に單語中に於て直接に、此の種の内部的働作を體驗する。さうして吾人が一の文章を聴取する場合には、吾人は常に、そこに判断をせらるゝといふ事を表象するのみならず、或は此の事を知得若くは知得すると信ずるのみならず、更に吾人に對し、判断といふものが文章の中に於て與へられる。吾人は、文章を聴取する事により判断を「聴取」する。吾人は發語者の中に於て、又彼れと一緒に於て、判断をなす。

之を他語を以てすると、言語の理解といふものは、表象や知得や信ずる作用ではない。之は簡言すると、決して知力的の働作ではなく、之に反し感情移入作用である。「感情移入作用」なるものは、實に、一の客觀的のもの、外部から吾人に與へられたもの、中に於て一の内部的行動或は行爲を直接に體驗するといふ事である。之は吾人自我の客觀作用である。さうして此の如き作用が、今の場合にも存在する。吾人は、聴取した單語中に於て、吾人が目視或は聴取せず之に反し單に吾人自らの行爲として發見し得るものを體驗するのである。

勿論此の場合に於ても、知力性のもものは、追加的に發生する。之は正しく感情移入から發生する。之は此の故に一の副貳的のものである。之は感情移入から分離され得る。されど此の過程に關し今茲で再び立入るを要しない。吾人は之に對しては、第二篇第二章を指示して置く。

されど一つの事を附言しよう。一の判断を宣言する所の文章の中に、吾人に對して判断が存在すると同様に、換言すれば、文章そのものを聴取する中に吾人が該當的に判断すると同様に、吾人に對し、意志といふものゝ言語的發表中に於て、直接に意志が存在するのである。吾人は常に、發言者が意志するといふ事を表象するのみならず、更に正しく此の如き意志を體驗する。吾人は之を内部的に模倣する。或は同様の行爲する。

されど勿論、此の如き同様の行爲或は此の如き感情移入作用といふものは、必然的に積極的の感情移入作用ではない。感情移入作用が此の如きものとなるのは、吾人の中に於て何等の矛盾が起らず。随つて吾人が、吾人の本心からそのやうに判断したり或は意志したりし得る場合である。之は此の反對の場合に於ては、同様の行爲といふものゝ單なる傾向、或は吾人が吾人を反抗せしむる所の同様の行爲の一の強制である。さうして吾人が吾人を反抗せしむる事が多ければ多い程、益々多く感情移入作用といふものは、消極的のものとなる。即ち吾人の自我の可感的の否定となる。されど強制といふものは何時でも存在する。各の聴取された判断及び意志といふものゝ各の宣示は、それ自身の中に、該當する判断及び意志に迄の強制を包有する。即ち「暗示的」の力を有する。吾人は、例へば催眠状態中に於けるが如く、抵抗の能力を失ひ居る場合には「暗示」といふものに無抵抗に服従する。

最後に、右に説示した事實關係をば、吾人は次の如く發表する事が能きる。曰く、言語は「象徴」であると。言語的象徴法といふ事實は、かの積極的又は消極的の感情移入の事實である。之は、若しも言語といふものが「純粹なる美的觀照」の對象である場合には、美的象徴法といふものとなる。尙之に就いては後に語る事にする。

四 言語的象徴法の元素

右に述べたるものに對しては、後になつて連結さるべくある。先第一には、吾人は此の點を放棄する。既に述べたる如く、言語的象徴法の元素といふものは、諸種である。吾人は今、かゝる元素を區別せねばならぬ。

併し二つの見地に基いて此の種の元素は區別せられ得る。吾人は第一に尋究する事が能きる。一體言語に於ける何ものが、象徴法の可能なる帶有者であるかと。第二には、言語的象徴法なるものは如何なる内容を有するかと。かゝる見地の第一のものは、以下に於て分類を特に規定する。されど第二の見地は、より詳細に叙述する事により、適當に解説せらるゝ事になる。吾人は此の故に、言語に於ては先第一に、それをして象徴的のものとなり得るに至らしむる所の元素といふものを區別する。

言語、或は之をよりよく言明すると、單語から成立する所の全體、即ち談話又は作品といふものは、一切の「意義」を別にするも、既に單なる音複合體、或は音複合體の單なる結合として、象徴的のものである。かゝる象徴法の元素をば、吾人は簡單に聽覺的元素と呼び得る。吾人は又、かゝる元素が、言語並に音樂に共通であるか又は音樂に於てその同質物を有するが故に、言語的象徴法の音樂的元素と稱する事も能きる。言語的藝術品なるものは、かゝる象徴法がそれに對して生活を吹込みさうして美といふものを附與する程度に於て、音藝術品である。

此の如き聽覺的元素に對して、「意義」上の元素といふものが存立する。かの談話或は作品なるものは、事物の報告をなす。此等は、確言したり報知したり叙述したり説話したり教誨したりする。

されど此の場合に於ては、二重の疑問が提起され得る。第一には、談話或は作品が如何に右の事を爲すか。報知したり叙述したり説話したりする等の此等のものゝ方法は何であるかと。第二には、談話者或は作家といふものは、何に就いて報告するか。如何なる事物に就いて彼等は語り、かゝる事物に就き何を陳述するかと。右の第一の疑問は陳述の形式或は形式的のものに關係し、第二の疑問は陳述の物象的のものに關係する。而もかくなると共に、言語或は言語的全體といふものゝ元素のもう一つの反對、並に之と同時に、言語的象徴法の可能なる種類のもう一つの反對といふものが、説示される。即ち象徴的元素なるものは、形式的性質のものと、物象的性質のものとなり得るのである。

此の如きが故に、吾人は、言語的全體といふものに於て、三種のものを區別する。一は音であり、二は談話或は陳述の形式、三は物象的のものである。随つて吾人は、聽覺的のものゝ象徴法、形式的のものゝ象徴法、談話或は作品の物象的の元素の象徴法といふものを區別するのである。

五 音元素

言語の聽覺的元素といふものも亦、種々の種類のものであり得る。特に此の二つの種類が相互に對立さるべくある。一は狹義に於ける「音元素」といふものであり、一は韻律的元素なるものである。此の際「韻律的」といふ語は、廣義に解釋さるゝのであつて、即ち一般的の演述法、或は主觀的に述べると、談話或は作品を手に入れ之を享樂する所の者の精神中に於ける言語及び言語列の經過の方法と解釋さるべくあるのである。

吾人は先第一に、談話或は作品の高聲なる演述に於て、之に對して附加せらるゝ所の「音元素」、即ち談話或は

作品に對しての、それと無關係なる附加物を擧示する。之は、演述者の聲の音色である。談話或は作品自體中には、此の如きものは少しも存在しない。けれども之が、此等に附加せらるゝ事により、之は、談話或は作品に對しても、意義を取得する。之は、談話或は作品自體の美的要素となる。蓋し各の聲の音色中には、特異なる或るもの、内部性の一の動力、吾人が吾人の中に於て共同的に感じながら體驗し、積極的又は消極的に同感したりする所の一の人格的性質といふものが、存在するのである。

されど吾人は、談話或は作品自體の中に存在するものに迄立入つて見よう。かの單語なるものは、音から成立する。即ち母音と子音とから成立する。かゝる音は、それが發音せらるゝ際の音色を別にするも、その音色を有する。かゝる音色は、先第一に、音樂上の音に於て、その美的意義を有する。吾人は前章に於て述べた。一般に各の音樂上の音の中には、吾人に對し、一の欲求或は意志、内部的活動性、活動或は流出等が存在し、此等は、音の強弱高低、その同様の進行する所の經過、或は膨脹又は收縮、その繼續期間、特にその音色等に應じ、それ〴〵異なりたる種類のものとなる。

されど若しも音樂上の音にして此の如き事實關係をなすならば、言語上の音に於ても、同様の事實關係をなさねばならぬ。併し今此の所では、特に言語上の音の種々の音性質を取上げて居る。吾人は一般的に言明し得る。各の言語上の音といふものは、その音の爲に、一の特異なる個體性のやうなものを有すると。音に母音のみならず、更に子音も此の如きものを有する。

されど言語上の音なるものは、各個のものではなくて、結合をする。かくなると共に、言語上の音の象徴法といふものは、擴張をされる。今や、押韻、半諧音、並に音の復歸及び變化の種々なる方法が現出する。繼起する所の音の間には、一致と反對といふものが存立し、而も此等は、音樂上の音の一致と反對、同種性と異他性、その復歸及び變化、その分裂及び並行の方法、旋律の範圍内に於て音から音に迄の急激なる進行及び平滑なる進行などに、敢へて同一ではないが、比較し得べくあるものである。更に音の繼起中に於て、單一或はより少く單一なる「諧音」又は「不諧音」の種類が發生する。

さうして此等の中には、それ〴〵異なりたる種類の活躍性が存在する。繼起する所の音の何等の差異及び變化の種類、何等の同一性又は類似性が、全然美的意義なしに止まる事は能きぬ。換言すると、凡て以上のものに於ては、吾人は、一の特異なる内部性、或はよしや輕微であるとはいへ尙吾人が詩歌或は作品中に於て體驗する所の全體的生活の色彩を感じる。吾人は、言語上の音が、甲若くは乙の方法、又は同種或は豊富なる變化に於て繼起し、質的に相互から離隔したり又は相互に迄復歸したり、甲から乙への進行の方法が無媒介的の急激或は平滑の性質を有したり、鈍重又は輕快に遂行せらるゝかに隨ひ、常に異なりたる機嫌に出づる。即ち談話或は作品中に於て常に異様に體驗をなすのである。

六 韻律的元素

言語並に言語的象徴法の以上のやうな音元素に對し、並列して、韻律的元素といふものが存現する。吾人は、かゝる元素に迄、第一に、速度及び速度の變化、その加速及び弛緩といふものを計入する。第二には同種的にし

て變化する所の鳴り響き、随つて強聲及び弱聲の持續的進行、又は演述の漸強及び漸弱等も此の中に入る。最後には、音聲状態の持續的の高低、並に音聲の變化する所の響きもさうである。凡て此等に於ては、吾人は最も直接的の方法に於て、一の内部的興奮、内部的現象、内部的行爲及び活動の之々の種類の波浪といふものを體驗するのである。

されど斯かる韻律的元素の中に迄は、吾人は勿論先第一に、強調と不強調或はより少き強調の變化、鳴り始め及び鳴り止み、抑制と突出、進行、停留、休止等、簡言すれば曾て特に「韻律」といふ名稱を附與して置いた所の一切のものを計入する。此の際吾人は、散文的談話の人工的韻律、並に散文的談話の自然的韻律に迄想到する。此等の元素の象徴法に就いて言明した所のものは、今茲に繰返すのを要しない。

彼れが如き音元素と此のやうな韻律的元素との間には、一の反對が存立するのであつて、而もかゝる反對は決して誤りたるやうに解釋されてはならぬ。假りに一の詩歌が印刷されて吾人の前に存するとする。斯かる場合には、韻律的元素、即ち速度、音聲の響き、狹義に於ける韻律的元素などは、「音元素」と同様なる方法に於て、吾人の前に存する所の作品の「元素」でないやうに見ゆる。此等は、直接的に、此の中に於て發見されない。

之に對して注言すべくある。曰く、母音と子音の音色並に押韻等をば、吾人が作品を讀む時に發見しないと。例へていふと、押韻なるものは單語の同一なる音である。之は書記的形相の同一なる外觀ではない。然るに吾人が今爲された假定の下で直接に發見する所のものは、正しく書記的形相である。かゝる形相に對し、吾人は音を附加せねばならぬのである。

勿論音といふものは、書記的形相に迄附屬する。されど又、特定の演述法も、直接的でなく、之に反し書記的形相が一の意義を有する限りに於ては、かゝる形相に迄附屬する。即ち書記的形相なるものは、吾人に對し、特定の音表象の遂行を要求する。されど之と同時に、之は、己れ自體並に己れに附屬する音が、言語上の記號である限りに於ては、演述といふものゝ特定の方法を要求する。兩者は同一の方法に於て、書記的形相の中に存在し、同一なる方法に於て、之が所有或は之が權利である。

ところが斯く述ぶると共に、一の重要な差異が承認せらるゝのである。それは即ち書記的記號には、唯それが意義といふものゝ帶所有者となつて居るが爲に、演述の特定の方法が附屬する。或は之に對し特定の韻律的元素が附屬するといふ事であるのである。

併しその此の如くあるといふ事は、韻律的元素の象徴法が、此の如き韻律的元素そのものに迄、随つて言語といふものゝ音樂的元素、或は廣義に於ける「音元素」といふものに迄、結合されてあるといふ事を妨げない。よしや演述の速度、或は音聲の抑揚等が、語句の意義により制約されるとはいへ、尙、吾人が此の中に於て發見する所の特異なる生活といふものは、かゝる聽覺的元素に迄附着する。之は、語句が意味する所のものゝ中に直接的に存在しない。

されど象徴法の内容に對しては、勿論關係は異なる。韻律的元素が意義により制約されてあるといふ事は、必然的に、その象徴法も亦、語句の意義と内部的の關係に立つといふ事を言明する。かゝる象徴法は、音としての音が有する所の生活といふものを指示しない。之に反し語句としての音、換言すれば思想、感情、意志する所の

個人が、よつて以て告知をなし、又その告知をなす限りに於ての音が有する所の生活を、指示するのである。之を他語を以てすると、一方に於ては、母音及び子音の音色、並に押韻及び半諧音等の象徴法の爲に、音及び音結合自體が、有心化せらるゝやうに見え、他方に於ては、韻律的要素の象徴法により、音からでなく之に反し有意義の單語及び單語結合から成る所の「作品」といふものが、表情的のものとなる。さうして之は次の事以外ものを意味しない。曰く、右の韻律的要素が生活といふものを表現する。而も此の生活たるや、音元素即ち聽覺的元素をその帶有者として有するとはいへ、さり迎音の生活ではなく、之に反し音の奥底に潜み音により告示せらるゝ所の個人といふものゝ生活であると。かくて、音といふ手段により談説或は作品中に於て發言をする所ものは、是理念的の自我である事になるのである。

七 談話或は作品中の自我

以上の如く述べ來るといふと、吾人は極めて重要な一概念、即ち正しく「談話或は作品中の理念的自我」といふ概念に接觸するのである。假りに吾人にして、演述せらるゝ談話或は作品を聴取し、さうして演述者を目視するとする。かくあるとすると、右の理念的自我なるものは、吾人に對しては演述者の中にあり、その語句は彼れの語句であるやうに見ゆる。演述者といふものは、之々の速度、音聲の之々の響き等を盛用する事により、表情的に語る。彼れは、彼れの内部的活躍性の彼れの中に於ける現實的の種類か、又は唯吾人の印象に對してのみ存するといふ種類を告示する。

併しながら同時に、此の如き活躍性といふものは、談話或は作品と異なり、たる彼れの人格の活躍性ではない。之に反し彼れの理念的の自我の活躍性である。詳言すれば、談話或は作品の中に於て生活し此の中に没入する所の彼れの人格の活躍性である。此の如きが故に、之は、「作品」といふものが所有し、唯正しく演述者の中に於て現實的のものとなつた所の活躍性であるのである。

少くとも演述者が談話或は作品を演述する場合には、此の如き事實關係を爲す、換言すると、彼れが、彼れ自らの任意から此等に對して或るものを附加するのでもなければ、又此等から或るものを取去るのでもない。但し等の事は、此の場合には假定されてある。さうして斯かる假定の下では、演述者なるものは「談話或は作品」に外ならない。詳しくいふと、彼れは談話或は作品といふものが、よつて以て吾人に迄語る所の偶然的の機關であるのである。

之に反し、若しも吾人にして談話或は作品を讀むならば、彼れが如き理念的自我といふものは、各の意義に於て、唯、作品の中に於て與へられてある。今や談話或は作品は、「語る所の人格」である。即ち談話或は作品そのものゝ中には、語句の背後に、或はいつでも語句の間に、一の理會的自我が立つのであつて、斯かる自我は、語句を通して吾人に迄語り、又は語句の中に於て己れを發言せしむるのである。

併しながら此の如き理念的自我とても、吾人の自我以外の何物でもない。換言すれば、吾人は、單語及び單語の結合中に於て、語つたり發言したる所の吾人自らを發見する。作品の理念的自我なるものは、正しく吾人により感じ込まれた一の自我である。之は吾人の理念的自我である。されど作品の中に於て現實的にある。さう

して此の如き理念的自我、或は「談話」又は「作品」、若くは此の如く吾人と同一なる個人といふものは、談話或は作品に迄屬する所の速度、それに自然的なる聲の響き、兩者がよりて以て進行する所の韻律等が制約するが如くに、發言する。或は吾人に迄語る。談話或は作品なるものは、此等の元素の爲に、強方或は溫柔、鈍重或は輕易、嬉々或は眞面目、激情的或は靜穩等、恰も一の人格が甲若くは乙のものであつたり又あり得たりするが如くにあるのである。

八 形式的の發表元素

言語的象徴法即ち言語的藝術品中への感情移入の内容に於ける上に述べたやうな反對、隨つて、一方に於ては音及び音結合の有心性と、他方に於ては語句を通して吾人に迄「語る所の」理念的自我——談話或は作品の——韻律的元素中に存在せる表情との間の反對といふものは、音元素なるものが正しく談話或は作品の統一的全體に迄附屬する限りに於ては、決して一の反對ではない。此の故に又、音元素中に存する所の活躍性の元素といふものは、談話或は作品の自我に迄附屬する。之は、各個に於て色彩づけたり特徴づけたりしながら、「韻律的元素」中に於て與へられてある所のより廣大なる生活に迄一致する。

されど斯くあるが故に、音の生活が音そのものに結合されており、「韻律的の」生活が有意義の語句に迄結合されてあるといふ事から成立するといふ反對といふものは、依然として存立する。

ところが此の如き反對といふものは、更に進んで、言語的象徴的元素の第二の主要類屬に迄到達せしむる。か

ゝる元素は 全然、有意義の語句に於て吾人に迄語る所の「理念的自我」の發表に迄役立つ。既に述べたる如く、此の元素は形式的性質のものである。之は、之をより精密に云ふと、如何に創作者及び談話者が發表をなすかとの形式或は方法から成立する。之は陳述の形式から成立する。此の場合に於ても亦「己れを」發表する所のものは、作品或は談話の外の創作者或は談話者ではない。之に反し、之は、美的觀照に對しては正しく右の如き理念的自我である。或は、作品又は談話にして、理念的にして同時に美的觀照中に於て吾人により體驗された自我であるとか、若くは斯かる自我を己れの中に包有する限りに於ては、「作品或は談話」である。

吾人は云うた。韻律的元素即ち演述的元素なるものは、語句の意義によつて制約されたと。此の事は意味する。此の如き發表上の元素或は一の發表の此の如き帶有者なるものは、その存在に於てかゝる「意義」により制約されてあると。之を例へていふと、聲の甲若くはこの出し方といふものは、語句の意義によつて要求される。けれども發表といふものは、語の意義中に存在しない。即ち之によつて與へられたり此の中に包有されたりしてあらぬ。之に反し之はかゝる演述的元素そのものの中に存在するのである。

此の點に於ては、吾人が茲に就いて語り居る所の形成的の發表元素に對しては、事實關係は異なる。此の種の元素に於ては、發表といふものは、語句の意義によつて與へられる。之は、その意味に迄附帶的に屬する。此の如き形式的元素なるものは、その意義、或はそれが全體の意義に對して爲す所の貢獻の爲に、談話或は作品の理念的自我といふものを告知する。さうして之ぞ正しく、形式的の「發表元素」といふもの、特有の意義であるのである。

而も斯く述ぶると共に、吾人は本章の始めに於て述べた事項に迄復歸する事になる。それは即ち、單語及び文章の理解といふものは一種の感情移入作用をその中に包有するといふ事である。吾人は、此等に於て、一の事物の表象作用或は把握作用、若くは一の判斷、一の意志等を體驗するのである。

九 知力的の發表元素

右にいふやうな感情移入作用には、種々の種類がある。吾人は前既に述べた。吾人は吾人が感ずる所のもの、
 みを「感じ込む」と。けれども吾人は先第一に、一の事物の吾人自らの表象及び把握作用、並に吾人自らの判斷に於ては、二様のものを感じずる。吾人は第一に、表象する所の行爲、把握、進透作用の力、一の判斷の追求、疑問思索等を感じずる。第二には、吾人は、會得或は把握、判斷する所の行爲、簡言すれば精神的或は知力的勞作の甲若くは乙の方法といふものを感じずる。さうして凡て此等をば、吾人は聴取又は讀誦した語句の中に、感じ込み得る。感情移入作用にして此の如き内容を有する程度に於て、之は、その性質上でなく之に反しその内容上、知力的の感情移入作用である。換言すれば、之は一の知力的のもの或は知力的の働作、若くは知力的に活動せる人格といふもの、感じ込みみであるのである。

此の如き知力的行爲を吾人に對し存在するに至らしむる所の形式的の發表元素に迄、一の思想の表現の一切の詩的・修辭的手段及び方法といふものが屬する。先第一に、之に迄は、修辭語及び譬喩的語法、隱喩、比較及び諷刺等が屬する。第二には、既に、より單一にして靜平なる發表、或はより豊富にして且つより多く活躍化するなる發表の各の方法が、屬する。最後に、文章の構成の種類、一から他の歸結作用といふものも、此の中に於て吾人に對し直接に精神的行爲の特異なる方法が現示せらるゝ程度に於て、之に迄屬する。由來「文體」といふものは人間である。即ち此の中には一の人格といふものが存在する。さうして之は、此の文體中に於て、吾人に對し直接に體驗し得べき方法に於て存在し得るのである。

勿論かゝる斷案に對しては、一の注言をなすべくある。曰く、己れ自身を發表するとか又は一つの事柄を表現するとかの右の如き方法といふものは、表現された内容と分割さるべくあらぬと。吾人にして或る事物を他様に言説するならば、吾人は他の或るものを言説する事になる。少くとも吾人は、事物をば異なりたる光明の中に推進せしむる。或は之を一層明瞭、活躍的にして印象深くなしたり、又は此等の反對のやうになしたりする。而も此の如くなると共に、語句を聴取する所の人に對しても、事物は異なりたるものとなる。彼等は一の異なりたる人間として内部的に經驗するに至るであらう。然かはいふものゝ、理論的考察に於ては、右の兩者は區別され得るのである。

此の際常に牢記さるべくある。美的印象といふものに對しては、唯談話或は作品の語句全體中に於て聴者に對し直接に存在する所のものゝみが、關係事項であつて、決して、彼等が歸結する所のものとか、又は彼等が省察或は想像したりしながら其の眼前にある談話或は作品から眼を轉じたり或は此等以上に飛躍したりする場合に何等の意識中に來る所のものが、關係事項でないといふ事である。

十 情緒上の發表元素

以上のやうな、表現の形式によつて與へられたる知力的の發表元素には、情緒上の發表元素といふものが對立するのであつて、之とて單に理論的に前者から區別され得る。之を詳しくいふと、談話或は作品の中には、直接に、敢へて事物を考察し之を思想的に取扱ふ方法でなく、之に反し一の情意的の分享、即ち尊重或は評價、愛好又は憎惡、嘆美或は嫌厭といふものなどが、存在するのである。感情的の分享の此の如き發表には、先第一に情緒上の音聲及び間投詞といふものが、役立つ。次には、一の評價又は一の事柄の感情的發表をその中に包有する所の一切の賓辭、吾人が單一靜平に叙述、報告、説話せず又眞理を發言せず、之に反し同時に吾人の感情的人格を以て臨み居る際に吾人に自然的であるといふやうな語や句の各の選擇も、之に役立つ。

最後に、一般的談話の各の種類も、右の如き情緒上の發表に役立つ。本來吾人の言語なるものは、一切のものを人間化しようとの傾向の影響の下に發生した。之は到る所、事物への感情移入作用といふものをその中に帶有する。吾人に對し、一の山が聳ゆる、谷が延長する、平地が展開するといふ事を言明する所の者は、音にそこにあつたり起生したりする所のものを吾人に言明する許りではない。彼等は同時に、吾人に對し、山とか谷とか平地とかの中に感じ込んだ彼れの行爲、「高まつたり」、「延長したり」、「展開をなしたり」するといふ事を發生するに至らした所の彼等の内部的模倣といふものを吾人に與へる。此の如くして、既に各の通常の報知、特に一つの事柄の各の談話的又は詩的の表現といふものは、同時に、その事柄の中に感じ込んだ人間といふものを、そ

の中に帶有する。吾人が被表現物の中に感じ込む所の理念的の自我なるものは、既に、吾人に對し言語の本性といふものによつて與へられてある。

象徴法の特種の種類づけられてあつてさうして右の點に迄屬する所の元素といふものは、言語的體驗の多少の聯想的成分中に存在する。由來、或る語や句は、合經驗的に、特定の範圍に屬する。即ち陋屋とか、市街とか「民衆」とか、教育ある社會とか、詩的又は科學的の言語使用法とかに屬する。さうして斯くあると共に、語や句は特定の餘韻或は反響といふものを有する。吾人は、語や句と同時に、又語や句の中に於て、「範圍」といふもの、特殊の生活を體驗する。かゝる生活は、正しく合經驗的に、その範圍に迄附屬する。之は、該範圍と一緒に錯綜されてある。

或は語句にして研磨されて他様に特異であるとする。かゝる語句は音に眼立つのみならず、更に此の中には同時に、一の人格的元素、通常以外への談話者或は作品の脱出、又は談話或は作品の理念的自我の脱出、通常のものゝ個性化、並に之と共に、活躍化、増進といふものが存在する。若しもかゝる活躍化、増進にしてその特性に於て自然的でないならば、吾人は語句をば容體振りたるものと呼ぶ。かゝる場合には、人格的元素、通常以外への脱出といふものは、壞亂的に進出する。之に反し若しも吾人にして此等をば無理なしに内部的に同様の行爲し得るならば、此等は吾人に對し一の増大といふものを意味するのである。

此の如き附加物の爲に、吾人は語句そのものをば、崇高、卑野、粗大、精緻、輕些、或は個人的特異なるものと呼ぶ。吾人は語句が、之々に「響く」と云ふ。此の如き響をば、語句なるものは、實際、吾人がかの自尊的に

眺める所の眼に於て、「自尊」といふものを「目視し」、音楽に於て歡呼或は悲歎或は憧憬を「聴取」とすると同一の意義に於て、爲す。詳言すれば、吾人は語句が言明する所のものをば直接に語句の中に於て體驗する。吾人は、語句といふもの、彼れが如き「響き」が、その音、母音及び子音の音色、單語から成る一の全體中に於ける斯かる音色の結合などと混同されてはならぬとの警告を與ふる必要はないのである。

第六章 右の續き、言語的表現の

物象的方面

一 表白と客觀的報告

最後に、言語的表現の物象性のものが、言語の形式的の發表元素から、區別さるべくある。由來言語なるものは、各個又は一般の事實或は思想内容の叙述、報告、説話、傳達の手段である。吾人は今、此等多くの語の代りに、單に報告といふ一つの語を用ふる事にする。

人間の説話なるものは、聽覺的元素を別にするも、次の如き二つの姿態を有する。一には、之は、その形の爲に、説話者又は談話或は作品の理念的自我を指示する。二には、之は報告をする。

されど之に關し吾人は直に二重のものを區別せねばならぬ。即ち報告といふものも亦、二つの方面に向つて働く。一には、吾人は、吾人自らの内部的體驗及び心態に關して報告をなし得る。二には、吾人は、吾人の外にあ

る存在及び現象に關して報告し得る。さうして此の際、更に第一種の報告も、兩様の意義のものである。即ち吾人は、第一に、自然現象に接しての吾人の驚愕をば、全然、吾人が自然現象そのものに關して「報告」すると同一の意義に於て、「報告」し得る。第二には、吾人は、之と全然異なりたる意義に於て、之に就いて「報告」し、之に關する傳達をなすのである。

之を例へていふと、自然現象が、孰れかの時に於て吾人を驚愕せしめたといふ事を吾人が報告すると假定する。かかる報告は、自然現象の起生に關する報告と、同種類のものである。之に反し、吾人が依りて以て直接に吾人の現在の内部的態度を「表白」する所の報告、換言すれば「此の自然現象が吾人を驚愕せしむる」といふ文章中に存在する所の報告といふものは、右の報告と全く異なつて居る。此の第二種の報告なるものは、「吾人が意志する、願望する、又は希欲する」、「之は如何に美しくあるであらうか」といふ文章、若くは「吾人は信する。思認する」といふ文章中に存する所の報告と、同種類のものである。此の場合に於ても、報告は是右のやうな表白である。

ところが此の如き「表白」が持出されると、吾人は一の新たな事實關係に接觸するのである。吾人は以後に於て、此の事實關係をば此のやうな特殊の語により判然表示し、さうして「表白」でない所の報告をば、客觀的の報告として、之と區別する。

されど吾人は「表白」といふものゝ特異點、並に客觀的報告に對する之が反對性をば、尙一層精密に規定して見よう。先第一に吾人は強調する。吾人が茲に解釋するやうな意義に於ける表白といふものは、陳述或は一の文

章によつて仕送けられる。之は、その固有なる対象として、現在の内部的態度といふものを有する所の傳達である。或はかゝる傳達を目的とする所の「陳述」である。

かゝる傳達或は陳述の中には、先第一に、吾人が是迄語つて居つた所の「發表」、特に「形式的の發表元素」に對し、新奇なる或るものが存在する。即ち此等の語は次の如く理解されて居つた。特定の事物に關しての陳述でなく、之に反し、發表したり、或る一つの事物を表示し之に就いて説話したりする方法、換言すれば談話が標的となし居るものに接しての一の態度、或はその固有の對象に接しての一の態度を發表すべき方法である。

ところが此の如きものとは、茲にいふ陳述、即ち現在の内部的態度といふものを對象となし、直接に之が傳達に迄向注して居る所の陳述といふものは、判明に異なつて居る。

之に反し、一方に於ては表白、他方に於ては一の自然現象又は吾人の心態の過去の方法に關しての報告といふものゝ間には、全然、談話さるべくある對象に關しての差異が、存立するやうに見ゆる。否此の如き客觀的報告も亦、陳述といふものによつて仕送けられる。さうして此の如くあると共に、一般的に、表白といふものと客觀的報告との間の差異は、次のやうな場合には、何等の原理上の差異ではなくなる。それは、一の文章は正しく文章、一の陳述は正しく一の陳述であるとする所の人、換言すれば一切の文章及び陳述をば心理的及び論理的に同價とする所の人が、正當である場合なのである。

二 表白と客觀的報告をなす所の陳述

人によつては確言する者がある。文章なるものは判断の發表に役立つ。否恐らく文章或は陳述といふものは、取りも直さず判断と同一のものである。此の如き確言は奇怪なる誤謬である。文章なるものは、勿論一の事柄に關する判断の發表であり得る。けれども之は、之と同様に、事柄といふものゝ直接なる發表でもあり得る。此の第二の場合に於ては、「事柄」とは、いつでも説話者の現在の内部的態度である。かくて前種の陳述は客觀的の報告であり、後者は表白となる。

抑も一の自然現象を叙述し又は之に就いて報告をなす所の文章なるものは、是自然現象を發表するものでなく之に反し、之に關し説話者の心中に起生する所の判断といふものを發表するものである。之と同様に、一の人間が一の高貴なる判断をなしたといふ事を説話する所の文章は、該人間を發表するものでもなければ、又その高貴なる判断を發表するものでもない。之に反し、之とて亦、吾人の判断の發表、詳言すれば、人間が高貴なる判断をなしたといふ事の吾人の現實的の知識又は假想的の知識を發表するものである。此の文章は、若しも吾人に於て創作中に於て右様の事を説話するならば、吾人に對し、吾人の創作的想像の産物、即ち、吾人の表象作用或は表象の産物を發生せしむるに至る所の内部的行爲といふものゝ發表となるのである。

さうして最後に、之と同様に、吾人が一つの事柄に關し驚愕されたといふ事の傳達は、是吾人の驚愕を傳達するものではない。之に反し、之は、かゝる驚愕が吾人の心中に於て起生したといふ事の、吾人の想起或は吾人の想起判断を發表するのである。

之に反し此の逆に、吾人の現在の驚愕をば、「吾人が驚愕されてある」といふ文章によつて傳達するのは、是驚

愕に關する一の判断の發表でもなければ、又吾人の驚愕の表象の發表でもない。之に反しかゝる驚愕そのもの、發表である。之と同様に、「吾人が喜ぶ」「吾人は意志し信ずる」といふ文章は、正しく斯かる歡喜、かゝる意志、かゝる信ずる作用」の發表であるのである。

此の如きが故に、「表白」なるものは、傳達さるゝ事柄の直接なる發表に役立つ所の傳達である。之は報告といふものに對しては、かの事柄の直接の發表が、事柄の表象の發表或は事柄に關する判断の發表に對するが如き關係をなす。

表白といふものにして、一の内部的心態の直接の發表である限りに於ては、之は、形式的の「發表元素」、並に進んでは演述元素の「發表」と、同一の位置を占むる。象徴的要素の此等三個の種類といふものは、「發表」といふものゝ一の段階的繼起を表示する。今茲には言語的の發表といふものを問題となして居るといふ事を直接に判明ならしむる爲に、吾人はかゝる繼起をば、「告知作用」の段階的繼起と呼ぶ。吾人は例へていふと、第一には、吾人が報告する所の一の現象に對する吾人の内部的分享をば、吾人の音聲の出しやうによつて、告知する。第二には、此の如き同一の分享をば、表現の形式、語や句の選擇等によつて告知する。第三には、之をば「表白」といふものにより、最も完全なる方法に於て告知するのである。

同時に「告知」の凡て此等の種類といふものは、音樂に於ける内部的のものゝ發表と、類似をなす。又、造形藝術、或は舞踏、身振、簡言すれば、客觀的報告をなすものと假定しての凡ての藝術に於ける内部的のものゝ發表と、同様にある。之を例へていふと、吾人の現在の驚愕の直接なる言語的表白といふものは、同一の情緒の繪畫的發表又は彫塑的發表と、全然同一の位置に立つ。吾人は之迄言明し來りたる事柄に關し、次述の如きものを附加し得る。曰く、彼れが如き表白といふものは、一の「判断」の發表でない事、恰も繪畫中に於て吾人が目視するが如き一の人間の驚愕せる目付きが、一の判断の發表でないやうにあると。

三 間接的表現としての客觀的報告

上述の如くあるとして見るならば、客觀的報告をなす所の藝術といふものは、凡て、他の藝術に對して特殊の位置を占むる。即ち之に於てのみ、感官的所與物が、一の事柄の直接なる發表に役立たぬのである。

客觀的報告をなす所の藝術の此の如き特殊の位置をば、吾人は又他様に表示する事が能きる。曰く、一切の藝術は「表現をする」。けれども藝術に基く「表現」には、二種類があると。

「發表」をする所の元素に基いての表現といふものは直接なる表現である。上述したる所に據ると、客觀的報告をなす所の藝術以外の一切の藝術に於ける表現といふものは、此の如き種類のものである。

之は次のやうな事を意味する。凡て此等の藝術の作品に於ては、感官的に與へられたるものゝ中に於て直接に全體の美的内容といふものが存在する。此の際に於て、「與へる」といふ作用は、再生か又は單に與へるといふ作用かである。或は、時としてより多く、時としてはより少く、此の中の甲若くは乙である。かの彫塑家又は畫家は、或る度迄は、人間の身體の形を「再生」する。此の如き形の中に、直接に、表現さるゝ所の生活といふものが存在する。然るに建築家といふものは、形といふものを「與へ」、さうして此の中に於て又、形といふものゝ生

活を與へる。

ところが言語を以てする表現といふものは、之が告知をなし、かくて例へていふと叙情的表現並に戯曲的表現である限りに於ては、右の如き直接なる表現である。叙情的作家なるものは、一の内部的のものゝ發表をば、言語によりて再生する。即ち内部的のものを告知しそれを言語中に發出させようとの自然的方法をば、均しく言語によりて再生する。

之に反し、客觀的報告に基く表現、さうして斯かる表現のみが、間接的の表現である。之を例へていふと、一つの事件に就いて客觀的報告をなす所の叙事的作品といふものは、再生をなさない。之は言語を與へる。けれども斯かる言語といふものは、事件の自然的發表として事件に迄附屬しない。言語の中には、事件といふものは存在しない。之に反し事件の表象、並にその把握、結合、判斷の方法といふものが存在するのである。

以上の如くあるが故に、直接的表現と、間接的表現即ち客觀的報告に基く表現との間の反對といふものは、次の如くある。前者に於ては「表現」といふものゝ感官的に與へられたる帶有者が、直接に表現された内容、即ち美的内容の帶有者であり、後者に於ては、之は右の内容の表象の帶有者である。美的内容の帶有者といふものは、「美的象徴」と呼ばれる。随つて、直接的表現中に於ける感官的所與物は、此の如きものである。間接的表現に於ては、此の如きものは決して存在しない。

此の如き言明の代りに、吾人は又次の如く言明する事が能きる。直接的表現の帶有者、随つて「告知をなす所の」語句といふものは「感情移入」の對象となる。之に反し、報告をなす所の語句といふものは、それが全然報告をなす限りに於ては、感情移入の對象とはならぬのである。

四 客觀的報告をなす所の藝術に於ける感情移入作用

以上の如くあるが故に又、間接的表現、或は客觀的報告をなす所の藝術に於ても、一の感情移入作用、而も語句の中へではなくて、表現された事柄の中への感情移入作用といふものが、起生するのである。即ち語句の中への感情移入の代りに、報告せらるゝ所の事柄の中への感情移入が現出する。吾人は、叙述せらるゝ景色、説話せらるゝ所の、人間の語句、行爲、體驗の中に吾人を感じ込む。

語句といふものにして、客觀的に報告し、さうしてたゞ客觀的に報告のみをなす限りに於ては、右の如くあるけれども純然たる客觀的の報告なるものは、不可能の事である。語句によつて遂げらるゝ所の客觀的の報告といふものは、正しく語句によつて遂げられる。さうして語句なるものは、いつでも、同時に、告知をなす所の力といふものを有する。吾人は言つた。報告をなす所の語句中には、吾人に對し直接に、報告せらるゝ所の事柄の表象といふものが存在すると。されど之と同時に、上述したる所に據ると、此の中には、之以上のものが存在する。それは即ち表象の對象といふものを把握する特殊性、精神的の處理及び分享などである。此の中には、發表といふものゝ形式的元素が存在する。随つて此の中には、不可避的に、よしや多と少との程度の差異こそあれ、凡て此等の元素により告知をなす所の、创作者の人格といふものが存在するのである。

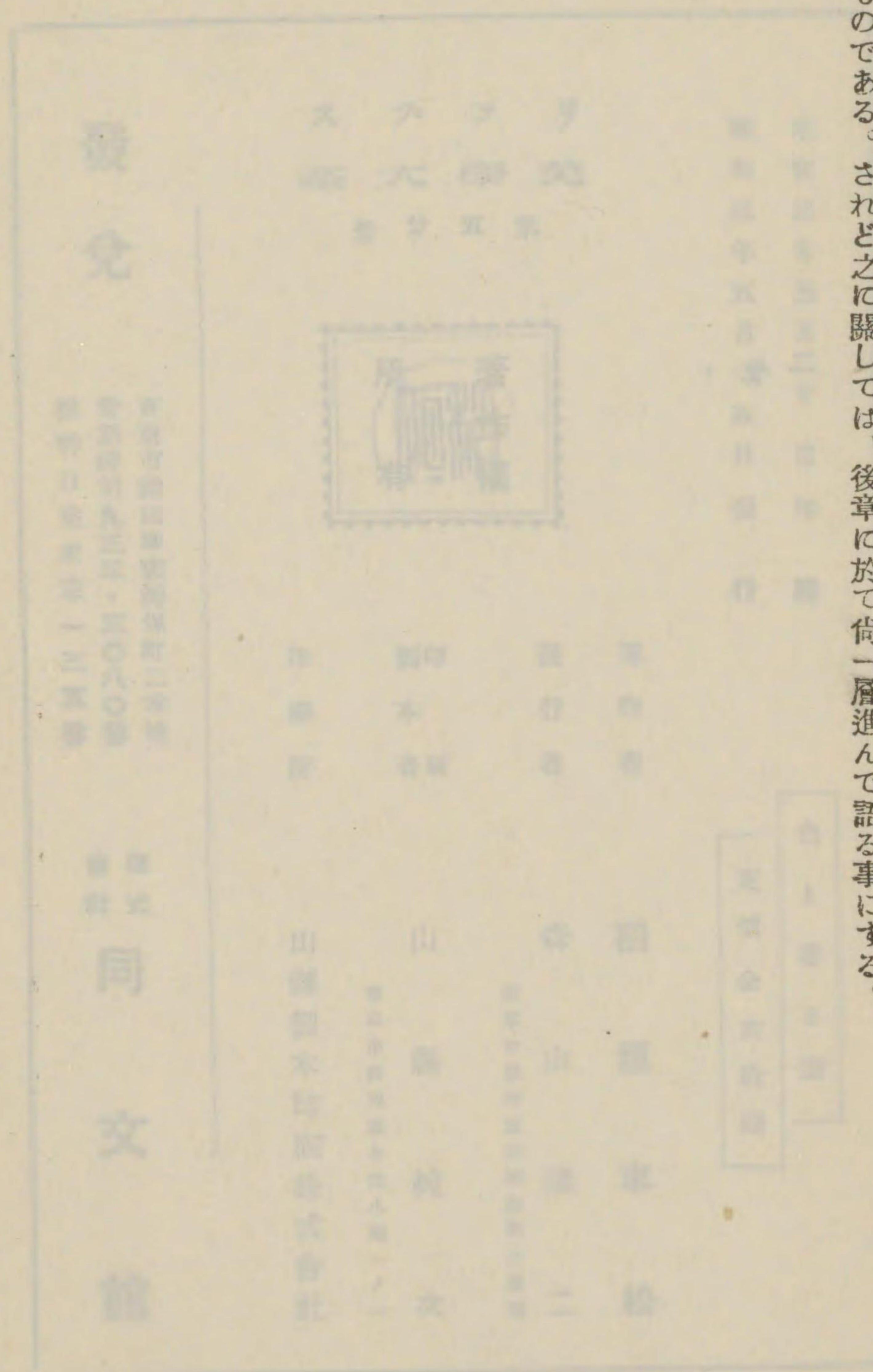
由來作品の世界なるものは、先第一に创作者の世界である。之は、创作者といふものが己れ自らを感じ込ませ

た所の世界である。さうして斯かる世界への吾人の感情移入作用といふものは、創作者を通して仕遂げられる。創作者といふものにして、吾人により感じ込まれた創作物の自我に外ならざる限りに於ては、吾人は此の事をば又次の如く發表する事が能きる。曰く、吾人は、創作物の中に吾人を感じ込ませ、吾人の中に於て「創作物」が強制して形成せしむる所の理念的自我を形成し、さうして今やかゝる理念的自我として、随つて特殊の光明に於て或は右により指命せらるゝ所の特定の見地から、表現された世界を觀照し、かゝる世界の中に吾人を感じ込ませると。

此の如くあると共に、かゝる感情移入作用といふものは、第二段階の感情移入作用として現出する。かの客觀的報告をなす所の創作物の理念的世界なるものは、叙情的作品又は劇の世界、若くは繪畫的藝術品又は彫塑的藝術品の世界のやうに、吾人に直接に現在するものとして共同的體驗をされない。之に反し、之は比較的遠隔の中に立ち、さうして吾人により、創作者又は創作物の自我に追隨しながら體驗される。前種の世界は、吾人が之を體驗する事により、吾人に對して發生する。然るに後種の世界は、先第一に、創作者の自我或は創作物に附屬するものとして與へられてあり、さうして吾人は之を發見する。之は、吾人が發見するが故に既にそこにある。此の故に正しく之に就いて客觀的に報告をされ得る。

特に「そこに」既にある所の事件といふものは、過ぎ去つて居る。此の故に、事件に關し客觀的に報告をする所の創作物、即ち叙事的作品といふものは、「曾て」といふ語を使用する。

要するに、世界といふものが「既に」そこにあるといふ事から成立する、客觀的報告をなす創作物の世界の特徴、並に之と同時に與へられたる、かゝる世界の「遠隔」といふものは、此の種の創作物の美學に對して決定的のものである。されど之に關しては、後章に於て尙一層進んで語る事にする。



著者の... 世界に...

この如くあると共に、...

著者の... 世界に...

昭和三年五月二十日 印刷
 昭和三年五月廿五日 發行

リッツス
 美大学大系
 第五分册



東京市神田區表神保町二番地
 電話神田九三三・三〇八〇番
 振替口座東京一三五番

株式會社
 同文館

色と音と語
 定價金六拾錢

著者 稻垣末松
 發行者 森山讓二
 製印本者 山縣純次
 印刷所 山縣製本印刷株式會社

餐食

昭和十三年三月三十一日
東京市神田區湯島二丁目

同人會館

大友會館
大友會館
大友會館



山陽道本印傳友會館
山陽道本印傳友會館
山陽道本印傳友會館
山陽道本印傳友會館

昭和十三年三月三十一日
東京市神田區湯島二丁目

同人會館

